色を聞いて、いづれも自然に佛を念じ、教法を念じ、僧伽を念ずる心になるのである。舍利弗よ、極樂淨土にはかやうな尊い莊嚴が具はつてゐる。

舍利弗よ、汝は心にどう思ふか。かの國の佛を何故に阿彌陀と號けたてまつるのであらう。舍利弗よ、かの佛の光明は曇りがなくて、あまねく十方世界を照らして至らぬところなく、何等の障碍をも受けさせられぬ。それゆゑに阿彌陀と號けたてまつるのである。舍利弗よ、かの阿彌陀佛及びそこの人民の壽命も限りなく、きはまりなく、心も、ことばも及ばぬほどに長い時間のものである。それゆゑにかの佛を阿彌陀と號けたてまつるのである。舍利弗よ、この阿彌陀佛が佛となられてから以來、已に十劫を經させられてゐる。

また舍利弗よ、かの阿彌陀佛のもとに、數限りもないほどの聲聞の弟子があつて、いづれもみな阿羅漢の覺りを得て、その數の多いことはとても算へることができない。またもろ〳〵の菩薩がたのゐられる數もまた同樣である。舍利弗よ、極樂國土はかやうな尊い聖者がたによつて莊嚴せられてゐる

また舍利弗よ、この極樂世界に生れたものは、みな道を退轉することのない菩薩である。この中にはまた、この一生を終へて、前佛の後を補ふて佛となる一生補處の菩薩も多い。ともにその數は無量であつて、とても數へつくすことができない。たゞ量りつくされぬほどの長い時間にわたつて說かるべきであらう。

舍利弗よ、上のやうな極樂淨土のありさまを聞くあらゆる衆生は、よろしく願ひを發してかの國に生れたいと願ふがよい。そのわけは勝れた人々と一處にゐることができるからである。

舍利弗よ、かの國に生れたいと欲ふても、僅かばかりの善根功德の因緣では、とてもかの國に生れることができない。舍利弗よ、もし善き男女があつて、阿彌陀佛のお慈悲を說くのを聞いて、そのみ名を心に信じ、一日あるひは二日、あるひは三日、あるひは四日、あるひは五日、あるひは六日、あるひは七日の間、時の多少にかゝはりなしに、一心にみ名を念じて、心を動かすことがないならば、その人のまさに命の終らうとするときに、阿彌陀佛がもろ〳〵の聖者がたゞゝもに、その人の前に現れさせられる。その人はいよ〳〵命の終るときになつても、心は亂れて身をもがくことなしに、たちどころに阿彌陀佛の極樂淨土に生れることができる。

舍利弗よ、私は上に述べたやうな利益を親しく見てゐるから、かやうに說くのである。さればもし衆生あつて私のこの教を聞くならば、よろしく願ひを發してかの國に生れるがよい。

舍利弗よ、私が今、阿彌陀佛の不可思議な功德を讃め嘆へるやうに、東方の世界にもまた阿閦鞞佛須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛のやうな恒河の沙の數ほどの諸佛がたが、各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆うて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには、「汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆へるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、南方の世界にも日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛などの恒河の沙の、數ほどの數限りのない諸佛がたが、各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆うて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには、「汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆へるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、西方の世界にも無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛などの恒河の沙の數ほどの數限りのない諸佛がたが、各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆うて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには、「汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆ふるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、北方の世界にも焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛、などの恒河の沙の數ほどの、數限りのない諸佛がたが各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆うて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには、「汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆へるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、下方の世界にも師子佛、名聞佛、名光佛、達磨佛、法幢佛、持法佛などの恒河の沙の數ほどの、數限りのない諸佛がたが、各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆うて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには、汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆へるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、上方の世界にも梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛などの恒河の沙の數ほどの、數限りのない諸佛がたが、各々その國に於て廣長の舌を舒べ、徧く三千大千世界を覆ふて、眞實の言葉を語られる。そして仰せられるには「汝等衆生よ、よろしくこの阿彌陀佛の不可思議の功德を讃め嘆へるこころの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。

舍利弗よ、何故に『一切諸佛所護念經』と呼ぶのであらうか。汝はこれをごう思ふ。

舍利弗よ、もし善き男女があつて、この諸佛の說かせられる阿彌陀佛のみ名及びこの經の名を聞くならば、これらの諸の善き男女はみな、あらゆる諸佛に護られて、佛のさとりに於て、不退轉を得ることができる。この故に『一切諸佛所護念經』と名けるのである。かやうな尊いわけがあるから、舍利弗よ、汝等はみなよろしく、私のこの教と諸佛のお說きなされることを信ずるがよい。

舍利弗よ、もし人あつて既に願ひを發し、あるひは現に願ひを發し、あるひは將來願ひを發して阿彌陀佛の國に生れたいと欲ふものは、みな佛のさとりに不退を得て、あるひは既にかの國に生れてゐるか、今生れるか、もしはゆく〳〵生れるかするであらう。されば舍利弗よ、諸の善き男女にして信あるものは、よろしく願ひを發してかの安樂國に生れるがよい。

舍利弗よ、私が今こゝに六方の諸佛がたが、阿彌陀佛の不可思議の功德を讚め嘆へたまふのを稱讚するのと同じやうに、かの諸佛もまた私の不可思議の功德をお讚めなされるのである。そして諸佛が宣ふには、「釋迦牟尼佛はよくも世にもまれな至難なことをなされ、よくもこの時濁り、世に邪見が行はれ、人の心は煩惱に濁り、德廢れ、生死の酣な五つの濁りに滿ちた世の中に於て、この上もない正しい普遍の智慧を得、もろ〳〵の衆生のために、世に信じ難い教法を說き弘められたことである」と。

舍利弗よ、明か知るがよい。この諸佛のお言葉に僞りはないのである。まことに私はこの濁れはてた惡世界に於て、至難な行をして正しい普遍の智慧を得、あらゆる世の人々のために、信じ難い法を說いたことである。まことにこれは甚だ難しいことであつた、よくも私はこの至難なことをなしたものである。』

世尊はかくの如くこの經を說き終らせられた。會座にあつて法を聽いてゐた舍利弗を初め、諸の弟子たちや、あらゆる世界の神々や、人間、*阿修羅などに至るまで、世尊の說かせられた功德廣大な謂れを聞いて、身も心も歡びに充ち、深く信じ受けて、恭しく世尊を禮拜してそれ〴〵退いたのである。

易　行　品

龍　樹

解題

世尊入滅の後、七百年、南天竺に生れ、大乘無上の法を宣揚せる龍樹菩薩は、殊に『十住毘婆娑論』に於て、生死の海を渡るべき眞實の道を顯はし給うた。『易行品』はその中の一章である。即ち先づ難行易行の道を開き、稱名憶念の易行に依りて、現身に不退轉の境に至ることを說き、而してその依るところ彌陀の本願にあることを彰はし給ふ。三經に說かれし往生淨土の敎は、かくして龍樹に依りて光闡し始められたのである。

易行品

聖者龍樹作

*菩薩が道に*不退轉ならんが爲には、諸〻の難行を修めて、漸くその境地に至るを得るのである。然るにその修行の困難は、動もすれば菩薩をして單なる*獨悟者たるに滿足せしめる。進んで一切衆生を救はうといふ志願を退轉せしむる。されぞそは甚だ患ふべきことで、その事は*『助道論』にも說いて置いた。

獨悟者にて足れりとするは
これ菩薩の死
衆生を救はねば
自らの德を失ふ

龍樹菩薩部

獨悟者にて足れりとするは
これ、菩薩の畏れ
たとへ地獄に墮つとも
かゝる畏れはあらじ

そは地獄におつることあるも
何時かは佛となる機緣もあらん
されど獨悟者となれるものは
遂に佛の道を遮つ

されば世尊*は說き給ひぬ
壽を惜しむ者の斬首を畏るゝごと
眞の菩薩ならば

獨悟者となるを畏れよ

こゝに於いては求道者は、「佛敎の中で不退轉の境地に至るべき易行の道はないか」と求むるであらう。されどかゝる要求は元來停弱怯劣で大心なきより生ぜるもの、これ決して丈夫志幹の言ふべきことでない。何故なれば、若し人、*無上道を願ひ求むるものならば、その退轉なき境地に向つて身命も惜しまず。日夜につとめ勵むべきであるから、『助道論』に

「頭髮の燒ゆるを救ふ心と
重擔を荷ふ力とをもて」
不退轉を求むる菩薩は
常に勤めて怠らざれ

獨悟を求むる人々すら

龍樹菩薩部

各がじし道を勤むる
まして自らを救ひ、人を救ふ菩薩は
億倍の精進なくてやは

されば世尊も、「佛道を願ひ求むるものは、三千世界を擧ぐるよりも重き任を負ふ」こ説き給ふた。然るにその難行に堪へて易行の道を求むるが如きは、實にこれ怯弱下劣こ言はねばならぬ。併し是非こも易行の方便をこいふならば、それは無いことはない。元來佛法には無量の門がある。恰も世間の道に難こ易こあり、陸路を歩行するは苦しく、水道に乘船するは樂しきが如く、」菩薩の道にも勤め勵みて至るものこ、信方便の易行をもて、速かに不退轉の境地に達するものこがある。

東の方、善德佛
南には栴檀德佛
西の方無量明佛
北の方相德佛
東南には無憂德
西南には寶施佛
西北には華德佛
東北には三乘行佛
下の方、明德佛
上の方、廣衆德佛
これらの諸の如來は
今現に十方にまします
不退の位すみやかに

得んと思はん人はみな
まさに恭敬の心もて
名號を執持ちてこれを稱へよ

もし菩薩、現身に不退轉の境地に至り、無上道を成ぜんと欲ふならば、この十方の諸佛を念ずるがよい。寶月童子所聞經の中には次の如く說かれてある。「世尊寶月に告げ給ふ。東方これより無邊の佛土を過ぎて、其處に無憂と名づくる世界がある。その地は平坦にして七つの寶から成り、紫金の縷をもて道界を交絡し、寶樹は列つて莊嚴を爲してゐる。其處には地獄・畜生・餓鬼・阿修羅及び諸の難處がない。淸淨にして穢れなく、沙礫・瓦石・山陵・墣阜・深坑・幽壑がない。天は常に華を雨らして大地に布いてゐる。こゝに佛がある、善德如來と號づく。大菩薩衆に恭敬せられ、圍繞せられ給ふ。身相の光は大金山の燃ゆるが如く、また珍寶の大なる聚の如くである。大衆に對して正法を說き演べたまふに、終始相應じ、辭美しく義深くして、一絲亂るゝ所がない。卽ち所說は正しく、內容は具足して缺くるところがない。それは地水火風の四大の理にも合し、欲界・色界・無色界の區別を

も明かにし、色・受・想・行・識・義をも詳かにしてある。寶月よ、この佛が成佛せられてから、今に六十億劫を經てゐる。またこの佛國には晝夜の異はない。されば六十億劫といふも唯この閻浮の日月歲數に依りて說くのみである。その佛の光明は常に世界を照らし、一度法を說き給ふ每に、無量無邊の衆生をして無生法忍（不退轉地）に住せしめらるゝ。寶月よ、この佛の本願力に依りて、若し他方に衆生あり、曾て善根を種ゑしことあるものならば、この佛、たゞ光明を以てその衆生の身を照らし給ふ時、卽ち無生法忍を得ることが出來る。寶月よ、若し善男子善女人ありて、この佛の名を聞いて信受するならば、卽ち無上道を退轉せぬであらう。

餘の九佛も同樣である。それで今は唯だ簡單にその佛名及びその佛國の名の意味のみを說明しやう。東方善德佛は、其德純善であつて但だ衆生を安樂ならしめらるゝので、彼の諸天・龍神の福德を有しつゝ、動もすれば衆生を惱ますものと異つてゐる。栴檀德佛といふのは、南方無邊の佛土を過ぎて歡喜と名づくる世界あり、其處に在して今現に法を說いてゐらるゝのである。恰も栴檀の香ばしくて淸涼なるが如く、彼の佛の名稱は遠く聞えて、衆生の三毒の火熱を滅除して淸涼ならしめ給ふ。無量明佛は、西方無邊の佛土を過ぎて善解と名づくる世界あり、其處に出現して今法を說いてゐらるゝ。

その佛の身光と智慧とは明かに徹照して無量無邊である。相德佛は、北方無邊の佛土を過ぎて不可動と名づくる世界あり、其處は今現に在して說法して居らるゝ。この佛の福德は幢の如く高く顯はれてゐる。無憂德佛は、東南方無邊の佛土を過ぎて月明と名づくる世界あり、其處に出現して今現に法を說き給ふ。その佛の神德は諸の人天をして憂愁あることなからしめらるゝ。寶施佛は、西南方無邊の佛土を過ぎて衆相と名づくる世界あり、今現に其處に在して法を說いて居らるゝ。その佛は諸の無漏の法の寶をもて常に衆生に施し給ふ。華德佛は、西北方無邊の佛土を過ぎて衆音と名づくる世界あり、其處に出現して今法を說いて居らるゝ。その佛の色身は恰も妙なる華の如く、その德は量り知ることは出來ぬ。三乘行佛は、東北方無邊の佛土を過ぎて安穩と名づくる世界あり、今現に其處に在して說法し給ふ。其佛は常に聲聞の行・獨覺の行・諸の菩薩の行を說いて居らるゝ。明德佛は、下方無邊の佛土を過ぎて廣大と名づくる世界あり、其處に出現して法を說いて居らるゝ。この佛は身の光明・智慧の光明・寶棟の光明を以て常に世間を照らし給ふ。廣衆德佛は、上方無邊の佛土を過ぎて衆月と名づくる世界あり、其處に在して今現に法を說いて居らるゝ。其佛の弟子衆の福德廣大なるこころより、廣衆德と名づけられたのである。今この十方の佛、初め善德より終り廣衆德までの如來を、若し人、一心にその名を稱念すれば、卽ち無上道の退轉せざるを得るのである。然るに是等十方の佛は、何れも皆過去に於いて、海德と名づくる佛に從つて願を發し、修行せられたのである。

量りなき時のむかし
海德と名づくる佛ゐましぬ
現在の十方の佛は
みなかの佛に從つて願を發し給ひにき

諸佛の壽命は量りなく
光明は極みなく照らします
國土はいとも淸淨にて
名を聞く者は不退を得ん

今、現に十方に在まして
智慧の力を遂げたまふ
されば恭敬の頭を垂れて
人天の師を禮したてまつらん

然るに但だこの十佛の名を聞き、執心して忘れざれば、無上道を退轉せざるを得るのみならず、また阿彌陀等の諸佛及び諸の大菩薩の名を稱へ、一心に念ずれば、不退轉を得る事が出來る。それ故阿彌陀佛等の諸佛も亦まさに恭敬し禮拜して、その名號を稱ふべきである。

無量壽佛、世自在王佛・師子意佛・法意佛・梵相佛・世相佛……普賢佛・普華佛・寶相佛、この諸佛は現に十方の淸淨世界に在す。皆名を稱へて憶念せよ。

阿彌陀佛の本願はかうである。「若し人、我を念じ、名を稱へて自ら歸命すれば、卽ち必定(不退轉)に入りて無上道を得ん」と。それ故、常に憶念すべきである。偈を以て讃へまつる。

量りなき光明ある
慧身は金山の如し
我、いま身と語と意とをもて
合掌し、禮したてまつる

妙なる金色の光は
普く諸の世界に流れて
機に應じてその色を示現す
そのみ相に禮したてまつる

もし人命終る時
かの佛國に生れ得ば
量りなき德は與へられん

龍樹菩薩部

我いま歸命したてまつる

この佛の量りなき
力と德とを念ずる人は
直ちに不退轉の身とならん
故に我、常に念じまつる

かの國の人は命終り
たとへ苦しみ受けむとも
惡しき世界に墮つるなし
歸命し禮したてまつる

かの國に生るゝ衆生は

永く地獄と餓鬼と畜生と
阿修羅の身をばまた得まじ
我いま歸命し禮しまつる

かの國の人々は
金色の姿、等しくて
俱にみ佛にかしづけり
頭を垂れて禮しまつる

かの國に生るゝものは
*天眼、*天耳の通力を具へて
十方の見聞に障りなし
かの佛を禮したてまつる

かの國の人々は
神變の力あり、他心を知り
また宿世の因緣を知る
かの佛に歸命したてまつる

彼の國に生るゝ者は
我ど所有ごに囚はれず
自他の距てを生ぜざり
頭を垂れて禮しまつる

其處には、迷の牢獄を離れ
眼、蓮華の如く明かなる

聖者達數多くます
頭を垂れて禮しまつる

かの國の人々は
その性柔和にして
自ら十善を行へり
今かの佛を禮しまつる

善より淨き智慧は生る
その智は量りがたし
人中の第一なり
我、いま歸命したてまつる

龍樹菩薩部

人もし佛たらんこ願ひ
心に阿彌陀を念じまつれば
直にその身を現はし給ふ
故に我歸命したてまつる

佛の本願力によりて
十方の菩薩達は來り
恭敬して法を聽く
故に我、禮したてまつる

かの土の菩薩は
諸の相好を具へて
自ら身を莊嚴る

我いま歸命し禮したてまつる

かの土の大菩薩は
日々に三たび
十方の佛を供養す
頭を垂れて禮したてまつる

人若し善の種まくも
疑あらばその華は開けじ
淨き信あるものならば
華は開いて佛を見まつらん

現に十方に在す佛は

易行品

龍樹菩薩部

さまゞの因緣もて
彌陀の德を嘆へたまふ
故に今われ歸命し禮したてまつる

その國の莊嚴は美はしく
かの天の宮居にまさりて
功德甚だ深かりなん
故にみ佛を禮したてまつる

佛足の千輻輪は
柔かにして蓮華の色あり
見るもの歡びを生ず
故に今首を垂れて禮しまつる

眉間の白毫の光は
清く明かなる月の如く
御顏の色を輝かす
故にいま佛を禮したてまつる

昔、道を求め給ひし時
勝れし行を修し給ひしことは
多くの經にも現はれぬ
我いま頭を垂れて禮したてまつる

かのみ佛の說法を聞けば
諸の罪障は除かれん

易行品

龍樹菩薩部

妙なる御聲に人は救はる
我いま頭を垂れて禮しまつる

その妙なる御言をもて
樂に愛着する病を除き
已に除き、今も除きつゝます
故に頭を垂れて禮しまつる

すべての聖者達
人間も、天人も
みな共にこの佛に歸命す
故に我もまた禮したてまつる

かの大願の船に乘りて
生死の海に浮びつゝ
佛は自らと衆生とを救ひます
我はこの自在人に禮しまつる

その德を稱め讃へんとて
諸佛も量りなき時を經るも
遂に說き盡すこと能はざらん
この淨き覺者に歸命しまつる

我も今、諸佛にならひて
無量の德を稱め讃へん
この因緣によりて

願くば、佛、常に我を念じませ

この世に過ぎし世ごに
我が修めつる多少の善は
願くは佛のみもとに於いて
淨められて眞の心ごならん

修めし善の因緣にて
獲べき勝れしその德は
願くは凡べての衆生にも
みな悉く得せしめよ

また毘婆尸佛・尸棄佛・毘首婆伏佛・拘樓珊提伽佛・迦那牟尼佛・迦葉佛・釋迦牟尼佛及び未來世の彌

勒佛ご念じ、みなまさに憶念禮拜すべきである。偈を以て讃へまつる。

毘婆尸世尊は
*無憂樹の下にて
一切智を得
妙なる德を成り給ひ
身を世間に現はしつゝも
その心は解脫を得ましぬ
我いま全身をもて
無上尊に歸命しまつる

尸棄佛世尊は
邠他利ご名づくる

龍樹菩薩部

*道場樹の下に坐して
菩提を成じ給ひたり
比ひもあらぬその御身
紫金の輝くごとくなり
この人中の無上尊
いま我自ら歸命しまつる

毘首婆世尊は
婆羅樹の下にゐまして
すべての勝れし智慧をば
自ら獲たまひぬ
人間と天人との中にして
比ぶべきものはあらじ

故にこの最勝の尊
我、いま歸命したてまつる

迦求村佛は
無上道を求めて
尸利沙樹の下に
大智慧を成じて
永く生死を脱れませり
我今この無比尊を禮しまつる

迦那含牟尼佛は
優曇鉢樹の下にして
佛の道を成りたまひ

龍樹菩薩部

すべての事理に通じますこと
量りなくまた遠りなし
故に我この無上尊に歸命しまつる

迦葉佛は
弱拘樓陀樹の下にして
佛の道を成りましぬ
御眼、鮮かに蓮華のごと
世に畏るゝものしなければ
行歩は象王の如く在す
我いま頭うなだれて
この無極尊に歸命しまつる

釋迦牟尼佛は
阿輸陀樹の下にして
惡魔を降伏したまひてぞ
無上道を成りましぬ
御貌は滿月のごと
清くして缺くるこころなし
我今頭うなだれて
その第一尊を禮したてまつる

未來の彌勒佛は
那伽樹の下にゐまして
大悲の心を開き
自ら佛道を成りまさむ

その德に勝るものあらじ
故に我この妙なる法の王に歸しまつる

また過去未來現在の諸佛は、ここぐく憶念し、恭敬し、禮拜すべきである。偈をもて讃へまつる

過ぎし世の諸の佛は
多くの魔を降伏し
智慧の力もて
衆生を救ひたまひにき
かの時の衆生は
心を盡して供養しつ
恭敬して稱めたゝへたり
故に我も今また禮したてまつる

現に十方の世界に在す
佛の數は量りなし
衆生を慈しみ
常に妙法を說き給ふ
されば我いま恭敬の心もて
歸命し禮したてまつる

未來世の諸佛は
黃金の如き御身より
量りなき光を放ち
自らも莊嚴し給へり
世に出でまして衆生を救ひ

龍樹菩薩部

*涅槃に還り給ふべし
これらの諸〻の世尊を
我いま頭を垂れて禮したてまつる

また諸〻の大菩薩を憶念せよ。善意菩薩・善眼菩薩・聞月菩薩、尸毘王菩薩……破魔菩薩・莊嚴國土菩薩・金髻菩薩・珠髻菩薩、これら諸〻の大菩薩を皆憶念し、恭敬し、禮拜して不退轉の境地を求むべきである。

十二 禮

解題

『十二禮』龍樹菩薩が專ら彌陀佛の德を歎へ給ひし讃歌である。支那の曇鸞大師、これに應和して『讃彌陀佛偈』を作り、更らに善導大師の『法事讃』『往生禮讃』等の讃歌となり、遂に親鸞聖人の『和讃』となる。佛恩功德を讃ふる聲は、遠く末代に流布して盡きざるのである。

十二禮

——阿彌陀佛を讃禮する歌——

龍樹菩薩作

眞心もて西方に在す阿彌陀佛を歸命し、禮したてまつる。

天と人とに恭敬せらるゝ
佛　阿彌陀は
彼の妙なる安樂國にありて
量りなき佛子を隨へ給ふ
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

龍樹菩薩部

金色の身は山王の如く
寂靜なる行は象の歩に似たり
兩の眼青蓮華にまがふ
故に我、彌陀佛を禮したてまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

面は淨らにして滿月の如く
威は千日の光に似たり
み聲は天の鼓にまがふ
故に我、彌陀佛を禮したてまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

(一)
觀音は冠の中に彌陀を頂き
種々に身を莊嚴して
魔と邪とこの憍慢を碎き給ふ
故に我、彌陀佛を禮したてまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

比びなく垢なき大なる
もろ〳〵の德は淨きこと大空のごとし
自在に衆生を利益し給ふ
故に我、彌陀佛を禮しまつる
願くば總ての衆生と共に

龍樹菩薩部

安樂國に往生せむことを

名、十方に聞えざる所なければ
菩薩も魔も常に讃め歎ふ
本願の力は衆生を攝受ひ給ふ
故に我、彌陀佛を禮しまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

黄金の池より蓮華を生ず
これ善根より成れる高坐ぞ
かの坐上に山王の如くるます
故に我、彌陀佛を禮しまつる

願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

十方の佛の子らは
神通を現はして安樂に往き
尊顏を仰いで常に恭敬す
故に我、彌陀佛を禮しまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

「一切は無常にしてまた我なし
水の中の月、電、影の如し」と
大衆に對して說法し給ふ

十二禮

龍樹菩薩部

故に我、彌陀佛を禮しまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

量りなき方便より成れる
淨土には苦と惡しき友はあらじ
往生するもの必ず菩提を退かず
故に我、彌陀佛を禮したてまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

彼の佛國には惡の名なく
また惡道にかへる怖れもなし

大衆は眞心もてかの佛を敬ふ
故に我、彌陀佛を禮したてまつる
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

邊りなき善は海のごとき
彌陀の功德を我は讃へて
淸淨の善をいま身にえたり
そを衆生に廻施して彼國に生れなむ
願くば總ての衆生と共に
安樂國に往生せむことを

往生淨土論

解題

『往生淨土論』略して『往生論』若しくは『淨土論』といふ。原典の内題には『無量壽經優婆提舍願生偈』とあり。淨土三部の經典の教を歸命の一心に領受して、更らに深く經意を顯開せられしものである。故に法然上人はこれを淨土正依の唯一なる論とし、親鸞聖人は特に「一心の華文」と讃じ給ふ。眞宗に於ける願力廻向の根本義は、實に斯論の解義に基するのである。されど言簡に意幽なれば、その深旨容易に知り難い。こゝに曇鸞大師の註解あり。よくその幽意を顯彰せらる。彼此對照して反復讀誦せば、必ず論主天親の心言を聞くを得るであらう。

往生淨土論

願生の歌

*世尊よ我は一心に
光、十方に*碍りなき
如來に歸命して
安樂國に生れむと願ぎまつる

眞實の功德を說きまし、
經典をたよりにて
我、今願生の歌を誦し

天親菩薩作

天親菩薩部

世尊の御教に應へまつらむ

かの如來の世界を觀るに
總て世の相に超ゆ
究まりなきこと大空の如く
廣大にして邊もあらじ

大なる慈悲の心は
穢なき善より成る
物みなは光に滿ちて
日月の輝くにまがふ

珍寶もて飾りたる

妙なる莊嚴をそなへたり
垢れもあらぬ光り、熾んに
朗かに世をこそ照らせ

千萬の華は
池の水際を覆ひ
微風、吹き渡れば
光は華と入り亂る

宮殿のもろ〳〵の樓閣は
十方を觀るに碍りなく
樹々に異るひかりあり
寶の欄干ぞめぐらせる

無量の寶まじはりて
虛空にあまねく羅網あり
金鈴、響き妙にして
み法の樂を奏でたり

如來の國の名を聞く者は
深き悟をぞ得む
そは覺者、彌陀の
法王として住持し給ふ所なれば

その覺者の御坐より
聖者は生れ

佛法の味にしたしみ
禪三昧を糧ごぞすなる

身心の惱は永に離れて
常に樂しみをうく
人々は皆道に眼覺めて
こゝには譏の名だになし
女、また根缺なく
諸果の賤しきものは生れず

われらの願ひは
すべて皆滿たさる
されば我ひこへに

天親菩薩部

かの彌陀の國に生れんと願ぎまつる

妙なる淨き華の臺
そこにまします
如來の姿は
光の中に輝き
妙なるみ聲は
譽き聞えざる所なし

御心は大空の如く
何物をも距て給はじ
諸の菩薩等は
淨き智慧の海より生る

勝れし山の如く在して
これに過ぎたるものはあらじ
諸の菩薩等は
敬ひ、繞り、仰ぎ瞻る

如來の願力を觀ずるに
遇ふものは空しく過ぎじ
大なる功德の寶を
速かによく滿たさしむ

安樂國は淨くして
そこに在す菩薩等は

天親菩薩部

穢れなきみ法を說きて
常に衆生をぞ救ひます

莊嚴、ひかり淸らけく
一念のまも小止みなく
佛のつごひ照らしては
もろ〳〵の人にめぐみあり

天の音樂、華の衣
香を降らして供養する
佛のもろ〳〵の功德をば
讃むるに距て心なし

菩薩は願ぎらく
「若し世界に佛法なからむものあらば我はその世に生れてぞ
如來の如く法を說かむ」と

我はかく願生の歌を誦しぬ
願くば彌陀を見たてまつり
普ねく衆生と共に
安樂國に往生せむ。

解義

この願生の歌は、かの安樂國を觀、阿彌陀佛を見たてまつり、その國に生れんこの願を表白したものである。若し信ある人々にして、五念門の行を修むるならば、必ず安樂國に生れて、かの阿彌陀佛を見るを得るであらう。

五念門こは

一、禮拜門
二、讃歎門
三、作願門
四、觀察門
五、廻向門

である。

禮拜こは、身を以て阿彌陀如來を禮拜し、かの國に生れたいこいふ意に住する事である。讃歎こは

語を以てかの如來の名を讃めたゞへて、かの如來の智慧の光の如く、またかの御名の意志に相應して修行したいこ欲ふこである。作願こは、必ず安樂國に往生して、本當に「止」の行を修めたいこ、一心に專念に、常に願ふここ、また觀察こは、智慧を以て正しく彼の國を觀察し、眞實の「觀」の行を修めんこ思ふここである。廻向こは、惱める衆生を捨てず。廻施を第一こして、大慈悲の心を成し遂けやうこ、心に常に願ふ事である。

觀察に就ては、その觀察すべきものに三種ある。一は彼の佛國土の莊嚴を觀察すること、二は阿彌陀佛の功德を觀察すること、三は彼國の菩薩の德を觀察すること。

かの佛國土の莊嚴は、不可思議な力を有つてゐること、恰も摩尼寶珠の如くである。それは更に十七種の功德に別たれる。その十七種こは、

一、清淨功德

『かの如來の世界を觀るに

天親菩薩部

總てうつし世の相に超ゆ』

二、無量功德

『究まりなきこゝ大空の如く
廣大にして邊もあらじ』

三、性功德

『大なる慈悲の心の
穢なき善より成る』

四、形相功德

『物みなは光に滿ちて
日月の輝くにまがふ』

五、種々事功德

（歌略）

六、妙色功德

（歌略）

七、觸功德

（歌略）

八、三種功德　水・地・虛空

『千萬の華は
池の水際を覆ひ
微風、吹き渡れば
光は華に入り亂る……水功德

宮殿のもろ〳〵の樓閣は
十方を觀るに碍なし……地功德
金鈴、響き妙にして
御法の樂を奏でたり』……虛空功德

九、雨功德
（歌略）

十、光明功德
（歌略）

十一、妙聲功德
『如來の國の名を聞く者は
深き悟をぞ得む』

十二、主功德
『そは覺者、彌陀の
法王として住持し給ふ所なれば』

十三、眷屬功德
『その覺者の御坐より
聖者は生れ』

十四、受用功德
『佛法の味に親しみ
禪三昧を糧こぞすなる』

十五、無諸難功德
『身心の惱は永へに離れて
常に樂しみをうく』

十六、大義門功德
『人々は皆道に眼覺めて
こゝには譏の名だになし』

十七、一切所求滿足功德
『われらの願は
すべて皆滿たさる』

である。これらの莊嚴に於いて、如來は自利と利他との大功德を成就し給ふ。故に彼の國土の莊嚴は實に第一義諦の妙境界である。

次に佛の莊嚴には、八種の功德がある。

一、座功德

（歌略）

二、身業功德

『如來の姿は
光の中に輝き』

三、口業功德

『妙なる御聲は
響き聞えざる所なし』

四、心業功德

『御心は大空の如く
何物をも隔て給はじ』

五、大衆功德

『諸〻の菩薩等は
淨き智慧の海より生る』

六、上首功德

（歌略）

七、主功德

（歌略）

八、不虛作住持功德

『如來の願力を觀ずるに
遇ふ者は空しく過ぎじ
大なる功德の寶を
速かによく滿たさしむ』

この中、最後の不虛作住持功德といふは、如來の願力によりて、未だ淨心を證り得ざる菩薩は、必ず平等の法身を證ることが出來て、淨心の菩薩と同一なる寂滅の境地に至ることをいふのである。これらの莊嚴に於いても、如來は自利と利他との大功德を成就し給ふのである。

最後に菩薩の德に就いて觀るに、彼の國の菩薩は四種の正しき修行の功德を成就してゐる。その四種には、一、一つの佛土にあり、身を動かさずして遍ねく、種々なる應現を爲して修行しつゝ常に佛事を成すこと。二、その應現の身が、一切の時において、前後なく、一心をもて一念に大なる光明を放ち、遍ねく十方世界に至り、衆生を敎化して、種々の方便もて、衆生の苦を滅ぼすこと、三、普ねく一切世界に於いて、諸佛とその大衆とを觀照し、廣大の供養をなし、恭敬して諸佛の功德を讃嘆すること、四、佛・法・僧の三寶なき處に於いて、能く佛・法・僧の功德を說き、聞くものをして如實の修行に入らしむることである。

『安樂國は淨くして
そこに在す菩薩等は
穢れなき御法を說きて
常に衆生をぞ救ひます

菩薩は願ぎらく
『若し世界の佛法なからむものならば
我はその世に生れてぞ如來の如く法を說かむ』

已上の三種功德は、これ如來の願心によりて莊嚴せられたるものである。それで三種の莊嚴も略していへば一法句に收まる。一法句といふは、淸淨句、淸淨句とは眞實の智慧に證らるゝ無爲の法身である。その淸淨といふことに二種あり、一は器世間淸淨、二は衆生世間淸淨である。前者には國土の莊嚴が攝められ、後者には佛と菩薩との莊嚴が攝められる。かくして一法句に二種の淸淨を攝し、隨つて總ての莊嚴を攝するのである。

菩薩は一法句に於いて止を修し、三種功德に於いて「觀」を行じて、柔輭の心を成じ、眞實に廣略の法を知りて、こゝに巧方便廻向を成就する。巧方便廻向こは禮拜等の五種の修行によりて集めし一切の功德の報を自身の安樂の爲にせず。一切の人々の苦しみを救はんが爲にし、一切の人々を攝取て、共に同じく彼の安樂佛國に生れんこ願ふこゝである。

かく善く廻向を知れる菩薩は、卽ち能く菩提に違ふ三種の法を離るゝことが出來る。三種こは、一には智慧に依りて自己の樂を求めず、我執のために自身を貪着することから離れる。二には慈悲に依りて一切の衆生の苦を救ひ、衆生を安んずる心のない障を離れる。三には方便に依りて一切の人々を愍むが故に、自身を供養する心から離れることである。

かくて菩提の三つの障りを離れるならば、自然にまこゝの菩提に隨順する三つの心を得る。卽ち一には無染淸淨心を得る。そは自身の爲に樂を求めないから、二には安淸淨心を得る。そは一切の人々の苦を救ふから、三には樂淸淨心を得る。そは人々を攝取して、彼の國に生れんこ願ふこゝは、自ら一切の人々をして菩提を得せしむることになるから。

然るに智慧こ慈悲こ方便こは般若（智慧）を攝め智慧は方便を含んでゐる。（故に如上の三種心は畢竟智慧心こ方便心この二こなる）。また自身を貪着することゝ、衆生を安んぜぬこゝ、自身を供養することゝを離れるこいふ事は、卽ち菩提を障へる心を離れるのであるから、唯一の無障心こ言へやう。同樣に無染こ安こ樂この三種淸淨心は、唯一の妙樂勝眞心こ名づけることが出來る。それで菩薩はこの智慧心・方便心・無障心・勝眞心ありて、能く淸淨の佛國土に生るゝことが出來る。而して菩薩をして意のまゝなる自在を得しめる。何故なれば、これらの淸淨心こそは、五念門の行、卽ち身業・語業・意業・智業・方便智業を成就せしむるものであるから。

更に五種の門ありて、順次に五種の功德を成就する。その五種の門こは

一、沂門
二、大會衆門
三、宅門

四、屋門
五、園林遊戯地門

この五種門、前四は入の功徳を成じ、後の一は出の功徳を成就する。

入の第一門こは、阿彌陀佛を禮拜して彼の國に生れむこ願へるが故に、その願の如く安樂世界に生るるを得るこゝである。入の第二門は、阿彌陀佛を讃嘆し、名の義に順ひ、如來の名を稱へ、如來の智慧の光に依りて修行せるが故に、聖者達の中に伍するを得るに名づける。入の第三門こは、一心專念に彼の國に生れて、寂靜の境なる「止」の行を修めむこ願へるが故に、蓮華藏世界に入るこゝが出來るこゝをいふのである。入の第四門こは、かの國の妙なる莊嚴を觀察して、「觀」を修せんこ專念せるこゝに依りて、佛國に到り、種々なる法の樂しみを受くるこゝである。最後に出の第五門こいふのは、大なる慈悲をもて、すべての惱める人々を觀、こゝに應化の身を現はして、生死の園、煩惱の林の中に分け入り、思ふがまゝに衆生を教化するの境地に至るこゝである。この自在の教化は、正しく菩薩の本願力の廻向によるのである。

かくして菩薩は四種の門に入りて自利の行を成じ、第五門に出でゝ、利他の行を成就する。而してかく自利々他するこゝに依りて、速かに無上道を成就するのである。

往生論註

『往生論註』は、曇鸞大師が天親菩薩の『往生淨土論』を註解せられしものである。大師始め佛門に歸しつゝ、中頃病にかゝり、爲めに長壽の法を求め、仙經を尊び得て得意であつた。然るに會々洛陽に於いて菩提流支に逢ひ、その法の深く懇むに足らざるを知り、また『觀無量壽經』を授かりて、卽ち仙經を燒き、深く淨土に歸入せられた。或は言ふ、その時大師が菩提流支より受けられしものは『往生淨土論』であつたと。されば大師これを反復翫味して、遂に天親の眞意に達し。こゝに煩惱具足の凡夫が、彌陀の往還二種の廻向に依りて、眞實の淨土に往生することを開顯し給ひた。これ實に眞宗敎義の基礎を爲すものである

往生論註

沙門曇鸞註解

上卷　解題及び偈の解釋

第一章　解題

龍樹の『十住論』(易行品)に依れば、菩薩、不退轉を求むるに難行と易行との二種の道あるといふ。然るにその難行道に依りて不退轉を求むることは、濁亂の世、無佛の時に於いては殊に難い。その事情の一二三を擧ぐれば、一には異敎の思想は菩薩の正法と混同せられ易い。二には悟り澄まさんとする傾向が大慈悲を障へる。三には反省を知らぬ惡人は他の德を破る。四には浮世の幸福が人倫を壞す。五には唯自力の道にして他力に持たるゝことがない。これ正しく現前の事實である。これ誠に陸路の步行の困難なるが如くである。之に反して易行道は、たゞ如來を信じて淨土に生れむと願へば

佛の願力に依りてやがてかの淸淨土に往生することが出來、佛力に攝められて卽ち大乘正定の聚に入ることである。正定とは卽ち不退轉である。誠にこれ水路の乘船の樂しきが如くである。今この無量壽經論（往生淨土論）は卽ちこの易行道を說ける大乘の極致であり、不退の風航である。

『無量壽』とはこれ安樂淨土の如來の名である。釋尊が王舍城及び舍衞國にありて、無量壽佛の莊嚴功德を說き給うた。されば佛の名を以てその經の體とする。後に聖者天親、如來大悲の敎を服膺して經に順つて願生の偈を作り、また自ら散文を以て解釋せられた。それが卽ちこの論である。

それで此論は大體二部に別れる。一は總說分で一は解義分である。總說分は偈の全部、解義分は散文の全部である。かく二部に別れたのは、偈は經を誦せるもので、自然總攝となり、論（散文）は偈を解釋するがゆゑに、卽ち解義となつたのである。

然るに論は大體五念門を說くものなるが故に、論をもて偈を見れば、偈の中、自ら五念門があるわけである。卽ち第一偈の四句には三念門が含んでゐる。初めの三句が禮拜・讚嘆門で、後の一句は作願門である。第二偈は天親が自ら偈を作れる所以を表白せるもの、それで前三門と後二門とを連結する。第三偈已下は觀察門、最後の一偈はこれ廻向門である。

第二章　自督の偈

『世尊よ我は一心に
光、十方に碍りなき
如來に歸命して
安樂國に生れむと願ぎまつる』

『世尊』とは總ての佛に通じ[illegible]の名である。佛は義理、達せざるなきの智を有し煩惱の氣さへも除き給ひし德を具ふるが故に、能く世の人々を利益し、隨つて世の人々から尊重せらるゝが故に、世尊と呼ぶことである。併し今こゝに世尊と呼ばるゝのは、恐らく殊に釋尊を指すのであらう。その事は次の偈に『經典をたよりにて……世尊の敎へに應へまつらむ』とあることから見て明かである。卽ち天親は釋尊の敎、漸く亂れむとする時に生れ、釋尊の說き給ひし眞實の經典に順つて安樂國に生れむと願はるゝのである。されば世尊の言は殊に釋迦を指すに相違ない。されごまたこの世尊の言は一

般に總ての佛を呼ぶのであるとしても差支はないであらう。菩薩の佛に歸依することは、恰も孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜自己の計を爲さず、進退必ず由るところあること同じである。さればいま菩薩、如來の恩を知りて德に報ゐんとするに當りて、先づ如來に啓白せらるゝこと、正に理の然るべきことである。また今天親の願は輕くはない。されば若し如來の加護なくば、恐らく願を達するを得ぬであらう。故に神力の加護を仰いで啓白せらるゝのである。

『我一心に』とは天親菩薩の自督の詞である。卽ちこの詞は、天親自ら光、碍なき如來を念じ、安樂國に生れんと願ふ心が、相續して他想の間て雜ることなきを現はすものである。

『光、十方に碍なき如來に歸命してといふは、歸命は禮拜門であり、盡十方無碍光如來（光、十方に碍なき如來）は讃嘆門である。歸命が禮拜であることは、龍樹の『易行品』に於ける阿彌陀の讃にも、稽首禮と歸命禮とを同樣に用ゐてあることでも知ることが出來る。殊に此論に於いては五念門を說いて禮拜を第一としてある。天親菩薩いま往生を願ふて居らるゝ。されば いかで禮拜せられぬで居られやう。故に歸命は卽ち禮拜であらねばならぬ。併しこゝに注意すべきは禮拜はこれ恭敬であつて、必らずしも歸命ではないが、歸命は必ず禮拜であることである。この點より見れば歸命の方が禮拜よりも意味が重い、いま偈は自心の表白であるから、殊に歸命の言を用ゐられたのであらう。それで論には偈の意味を解釋するに當りて、これを一般的に禮拜こせられたものである。

盡十方無碍光如來が讃嘆門であることは、論に天親自ら『讃嘆門』とは彼の如來の名を稱へて』等この たまへるにても明かである。舍衛國に於いて說かれし『阿彌陀經』に依れば、釋尊、阿彌陀如來の名を解して宣はく、『かの佛の光明は量りがたくて、あまねく十方世界を照らして至らぬ所なく、何等の碍障をも受けさせられぬ。それ故に阿彌陀と號けたてまつるのである。またかの阿彌陀佛及びそこの人民の壽命も限りなく、窮まりなく、心も言葉も及ばぬ程の長い時間のものであゝ　それ故にかの佛を阿彌陀と號けたてまつるのである』と。然るにこゝで若し如來の光明が量りなく十方の國土を照らして障りがないならば、何故吾等はその光を蒙らぬのであらうかといふことが問題となるであらう。されど此場合、碍は吾等にありて光にあるのではない。恰も日光は四方を照らすも盲者は見ることは出來ぬが、それは日光の周くないからでないと同じことである。されば今天親菩薩が盡十方無碍光如來と稱へらるゝのは、正しく彼の如來の名に依りて、かの智慧の光の如く讃嘆せらるゝのであるから、これ卽ち讃嘆門である。

『安樂國に生れんと願ぎまつる』この一句は作願門で、天親菩薩の歸命せらるゝ本意である。さてその安樂の意味は後に至りて論ずることゝして、こゝでは願生といふことの意味を明かにしやう。元來、佛教の原理は「無生」にある。されば生死を見るは迷であらう。然るに天親は何故に生を願はるるのであらうか。それに就いては、先づ佛教の無生といふことに二つの意味あることを知らねばならぬ。その一つは、凡人の思惟するやうに、生ける存在があつて、實際に生死するといふやうなことは、畢竟迷見に過ぎぬといふことを現はすもの、他の一つは、事物は因緣によりて生ずるのであるから、生ずるものもなく生ずるといふこともない。故に無生であるといふのである。そしてこの場合には、因緣生と無生と同じことであるから、その方面から假りに生と名づくることが出來る。今天親の生を願はるゝのは、正しく後者の意味ではない。然らば往生といふことの因緣は何んな狀態であらうか。謂く、こゝに人ありて五念門を修するとしやう。その行は念々に因果の連結をなして相續する。故に此土の人は自然に淨土の人となるから、此土の人と淨土の人とは一人であるとも異人であるとも言へぬのである。また相續する前心と後心とを一であるとも異であるとも言へぬのである。何故なれば、若し一ならば因果といふことがなくなり、若し異ならば相續といふことがなくなるから。

第三章　經典に依ることゝ

『眞實の功德を說きましゝ
經典をたよりにて
我、いま願生の歌を誦し
世尊の御教に應へまつらむ』

この偈は、天親が今偈を誦し、論を造ることは、偏に教主釋尊の教に順ひ、これに相應せんが爲めであるといふことを表白せらるゝのである。こゝに「依」といふ字が眼目である。(一)何に依るのであるか。(二)何故に依るのであるか。(三)云何やうに依るのであるか。(一)經典に依るのである。(二)經典に說き現はされし如來は卽ち眞實功德の相なるが故に依るのである。(三)五念門を修して佛教に相應するやうに依るのである。

「眞實の功德」とは、不實の功德でないことを現はす。後者は穢れたる心より生じて眞理に順ぜざる

もの、即ち凡俗の幸福と呼ぶものである。それらの幸福はその因も果も皆顚倒せるものであり、皆虚偽である。故にこれを不實功徳といふ。之れに反して前者は、菩薩の智慧の淨き業より生ぜるものであつて、眞理に順じ、顚倒ならず、虚偽ならぬものである。故にこれを眞實の功徳といふのである。ここに顚倒でないとは、眞理に依り二諦に契ふこと。また虚偽でないといふは、人々を救濟して淨き境地に入ることである。

第四章　觀察門の諸偈

上　器世間の觀察

一　清淨功德

『かの如來の世界を觀るに
總てうつし世の相に超ゆ』

觀察門は、器世間莊嚴の觀察と、衆生世間莊嚴の觀察とに別たれる。その器世間莊嚴の第一が清淨功德である。

佛、本この清淨功德を成就せんとし給ひし所以は、この現實の世界が虚偽に滿ち輪廻して窮まりなきこと、恰も尺取虫の同じ所を往きかふ如く、また蠶の繭を造りて自縛するに似たるを見て、人々

を虛僞なきこころ、窮まり無き輪廻を超えたる所に置き、淨き安樂の處を得せしめんこの願からである。故にかく成就されたる世界は、清淨にして破れず穢れず、この世の穢れ、且つ壞るゝものこと全く類を異にしてゐるのである。

蓋しこの現實の世界は、これ生こと死とに支配さるゝ凡夫のさ迷ふ闇黑の家である。こゝにあるものには、多少の苦樂の差異こと、生命の長短はあつても、全體としてこれを見れば、煩ひ惱みでないものはない。因は果を孕み、果は因を負ふて循環きはまりなく、種々の業に依りて苦樂を感受しては益々顚倒の見解に墮つ。かくして常に虛僞を離るることが出來ぬ。之に反して安樂國はこれ菩薩の慈悲こと智慧とより生ぜる所、如來の神力こと本願とに依りて建てられし所、こゝには迷ひの生はなく、業の繫ぎは斷たれてゐる。隨つてこゝに生るゝものは、自在の德を有してしかも功を誇らない。されば「うつし世の相に超ゆ」といふも、微かに淨土の相を示すに過ぎぬ。

二　量功德

『究まりなきこと大空の如く
廣大にして邊もあらじ』

この世界は狹小であつて、しかも高低の丘陵より成つてゐる。故は家屋は密集し、田地は境の爭ひを生ずる。遠くに往かんこと欲へば、或は道險難にして通じ難く、或は山河之を障へて徒に思を隔てしめる。加ふるに國界領土各々限りあり、これがために種々の紛擾を起すことである。故に佛もこと菩薩たりし時、莊嚴量功德の願を興し給ひ、「願くは我國土は大空の如くならん」こと念ぜられた。「大空のごとく」とは、往生する者云何に多くとも、恰も無きが如くにといふ意である。この願成就して、今や十方衆生の往生するもの、それは已に生れたるもの、今生るゝもの、まさに生るべきもの、量りなからんも、常に大空のごとく、廣大にして滿つる時はないのである。

されば『大空の如し』とはこの世界に相對して量を說けども、その實量を超えてゐることを現はすものである。而してこの廣大さは佛の願力の成就するところなれば、彼の維摩の小室が維摩の神通力に依りて、數萬の大衆を容れたといふ、一時的のものとは全く類を異にするのである。

三　性功德

『大なる慈悲の心の
穢れなき善より成る』

佛、この世を見給ふに、或は愛欲に迷ふ國土あり、或は禪さを追ふ世界がある。それらは皆邪しまの惑ひより成れるもの。しかも人々はこゝに長夜の夢を見て、この境より出でんこするものがない。佛、光に依りて大悲心を興し給ひ、「我佛こなり、無上なる正見の道を以て、穢れなき國土を起さん」こ願ひ給うた。性功德は卽ちこの願に依りて成就されたのである。

「性」こは「本」こいふ意味である。この淨土は法の性に隨ひ、法の本に乖かない。又これを習ひ性こなるこ解してもよい。法藏菩薩が長時に修行し給ひし功績で成れるが淨土であるから。また性こはこれ「聖種の性」である。始め法藏菩薩が世自在王佛のみもこに於て、永遠の法を認め給うた。その時の菩薩の心境が聖種の性である。この性の中にて四十八願を發して、この土を莊嚴せられた。それが卽ち

安樂淨土である。されば淨土の性功德こは、かの聖種の性より成れるものこいふ意味である。また性こは「必然」を意味し、改めざるを意味する。例へば海の性は一味であつて、多くの河川が流れ込んでも必ず一味こなし、決して海の味が彼の河川に依りて變改するこいふここはないやうに、安樂國に往生するものには、不淨の身なく、不淨の心なく、皆悉く淸くして平等なる、無爲の法身を得るであらう。これ卽ち安樂國は淸淨の性成就してゐるからである。

『大なる慈悲の心の穢れなき善』こは、平等の大道である。平等は法の眞相である。故にこの眞相を體驗せんこする發心こ平等であり、その發心から現はるる道も平等であり、隨つて其道を以て衆生を救濟する大慈悲も平等である。而してこの大慈悲こそは佛道の正因である。安樂淨土　正しくこの大慈悲より生ぜるものである。故にこの大慈悲をまた『淨土の根』こ名づくる。

四　妙聲功德

『如來の國の名を聞く者は
淨き悟をぞ得む』

この世界を觀るに、或は德ありて名の聞えざる國土あり、或は名聞ゆるも善美ならぬものがある。而してたゞその名善美なるも、必ずしもその名を聞くものを悟らしむるものではない。佛、これに依りて國土妙聲の願を立て給うた。經に依れば、『若し人、たゞ安樂淨土の名を聞いて願生するにその願の如く往生することを得』こと。これ卽ち淨土の名よく衆生を悟らしむる明證である。蓋し淨土はこれ菩薩の大なる業によりて成れるところなれば、迷界の彼岸にありて、その名よく直に人を覺ますを得るのである。

五　主眷屬の功德

『そは覺者彌陀の
法王として住持し給ふ所なれば
その覺者の御坐より
聖者は生れ』

暴君上にあれば天下亂れ、明王政を取れば四海波靜かである。治亂の狀は恰も草の風に靡くが如くである。これに依りて佛は、我が國土に於いて常に法王あらんことを願ひ給うた。淨土は法王の善力によりて持たるゝのである。魚母も子を念持すれば、長く水なき所にあるもその子は死せずといふことである。安樂國は覺者彌陀によりて念持せらるゝ。さればいかでその國に佛道の榮えざることがあらう。

この世にありては、或は母體を破りて生れ、或は汚穢の中に孵化する。或は高位高官にして不肖の子を出し、或は賤しき者の腹より優れたる才能を出すことがある。譏はこれより起りて嗔りの焰を懷き、辱はこれより生じて怨の氷を結ぶのである。佛、これに依りて願を起し、我が國土の人をして悉く如來の御坐なる淨き華の中より生れしめ、眷屬平等にして利權爭奪の路なからしめ給うたのである。

六　受用功德

『佛法の味にしたしみ
禪三昧を糧こぞすなる』

或は巣を探り、卵を破りて食こなし、或は沙の懸け袋を指して慰め合ふこゝなど、あゝ人々よ、かゝる事のある世は實に痛心すべきこゝではないか。この故に佛は大悲の願を起し給ひて、「願くば我が國土は佛法をもつて、禪定を以て、食こなして、永へに他食の勞なからしむ」こ念ぜられた。『佛法の味にしたしむ』こは、日月燈明佛の『法華經』を說き給ひし時の如くである。その時六十劫を經たるも、來聽者は皆一食の間のやうに覺えて、一人も身心に懈倦を生じなかつたこいふこゝである。『禪三昧を糧こぞすなる』こは、諸の大菩薩は常に定にありて他の食を爲さぬこゝである。また彼の淨土の人々は、食せんこ欲へば、百味の嘉饌直に前に現はる。そして眼、その色を見、鼻、その香をかぎ、身に適へる悅びをうけて、自然に飽足すれば、食物はやがて無くなるこいふこゝである。

七　大義門功德

『人々は皆道に眼覺めて
こゝには譏の名だになし
女、また根缺なく
證果の賤しきものは生れず』

淨土は大義にいたる門である。大義こは大乘である。人、城に至るに門より入る如く、安樂淨土に生るれば大乘を成就するのである。

濁世に誕生し給へる釋尊の教國では、單に教團の傳統者たるのみで、眞實濟世の業を爲す能はざるものがある。これを聲聞こ名づくる。また全く世を逃避して獨り悟りすます聖者がある。これを獨覺こいふ。この兩者は小乘こ呼ばれてゐる。卽ち證果の賤しきものである。それで佛の本願は、我が國にあるものは皆菩薩であつて、小乘もなければ、隨つて小乘の名も無いやうこ念ぜらるゝのであ

る。同様に淨土にはまた、女人こ不具者こなく、隨つてその名もないであらう。これ卽ち人々は皆道に眼覺むるからである。

然るに『無量壽經』に說かれし法藏菩薩の四十八願の中には、『若し私が佛こなる時、私の國の聲聞の數に限りがあつて、その數をかぞへ知られるならば私は佛にはなりませぬ』こ誓うてある。これ彼國に聲聞ある一の證である。また『十住論』の中に、龍樹菩薩は阿彌陀の讚を造りて云はく、『其處には、迷の牢獄を離れて、眼、蓮華の如く明かなる、聖者達（卽ち聲聞）數多くゐます。故に頭を垂れて禮したてまつる』こ。これ彼國に聲聞ある二の證である。また『智度論』に依れば、『佛土は種々不同である。或佛土には純ら聲聞のみがあり、或佛土には純ら菩薩のみがあり、或佛土には聲聞こ菩薩こが集會する。阿彌陀佛の國の如きはこの例である』こ。これ彼國に聲聞あるの三の證である。加之諸經の中に安樂國を說く所には、多く聲聞あることを言つて、聲聞の無いことを言つてはない。然るに今この論には、聲聞の名だもないことを言つてあるのは、何う領解したならばよいであらうか。

案ずるに恐らく安樂淨土には聲聞が居らぬこいふ方が本當であらう。何故ならば、病ありて藥あり、病なければ藥は無いに違ひがない。『法華經』によれば釋尊は濁れる世に出でましゝが故に、唯一の佛道を聲聞、緣覺、菩薩の三つに別ちて說き給ひしこいふ。然るに淨土には濁りが無いから、隨つて三つの別があるべき筈がないからである。また『法華經』に依るに、『聲聞は但だ虛妄を離れたるを解脫こすれども、實はまだ一切の解脫を得ては居らない。何故ならば、まだ無上道を得ては居らぬから』こ。隨つて聲聞の證を得たる阿羅漢も、一切の解脫を得ざる限り、何處かへ生れねばならぬ。併しそれは迷の世界へは生れぬであらう。（既に迷の因を離れたのであるから）。されば淨土を除いて外には聲聞の生るゝこころがない。しかも佛土へ生るれば、もはや聲聞ではないのである。故に淨土の聲聞こいふのは、來生せる聲聞を、その本名に依りて呼ぶのであらう。例へば、彼の橋尸迦こいふ人が帝釋天へ生れてその主こなりしも、釋尊がその本の名に隨つて帝釋天を橋尸迦こ呼ばれたやうなものである

又この論では、聲聞の種が淨土へ生ぜぬこいふのであるから、聲聞が淨土へ往くことは妨げぬであらう。橘は江北には生じない。けれども河洛の菓店に橘を見ることは出來る。また鸚鵡は隴西には住まない。けれども趙魏の鳥籠に鸚鵡が居るやうなものである。かく解釋すれば、經こ論こに矛盾はなくなるであらう。

これに依りて淨土に小乘のないことは明かになつた。同樣に女人や不具者も無いに違ひない。而して是等の體なき限り、その名の無いのも言を俟たぬであらう。然るに論には殊に是等の名のないことが說かれてある。これ蓋しその體なくも、譏りてその名を呼ぶ場合があるから、淨土にはその名もなきことを殊に明かにせられたのである。卽ち菩薩の勇猛心を缺くものを譏りて聲聞と言ひ、男子の諂曲にして懦弱なるを譏りて女人と言ひ、又眼ありて識なきものを譏りて盲人と言ひ、耳ありて言葉の意味を理解する能はざるものを聾人と言ひ、舌ありて語るも、訥言のものを譏りて瘂人と言ふ場合の如き、これその體なくして名あるものである。故に論では淨土にかゝる譏の名のないことを明かにせられたのである。

されば淨土には聲聞もなければ、その名もない。然るに法藏菩薩の本願を見、龍樹菩薩の讚を誦するに、云何にも彼國に聲聞の數多いことが一つの嘆ふべき點であるやうに見える。これは何う飾會すべきであらうか。案ずるに聲聞は虛無を證として生死を捨つる。故に再び起つて佛道の芽を生ぜしむることが出來ぬ。然るに彌陀は本願の不可思議の神力をもつて、彼を攝して淨土に生ぜしむるのみならず、進んで無上道の心を生ぜしむる。恰も鴆鳥水に入れば、魚類は悉く死ぬけれども、犀牛がこれに觸るれば、死せる者皆甦るが如くである。生ずべからずして生ずることは不思議である。世に不思議は多い中にも、佛法は最も不可思議である。如來、よく聲聞をして無上道心を生ぜしむる。眞に不可思議の至りである。

八　所求滿足功德

『われらの願ひは
すべて皆滿たさる
されば我ひこへに
かの彌陀の國に生れむと願ぎまつる』

或る者は、名高く位重いために、身を寂靜の境に隱すことが出來ないで困つてゐる。或る者は人凡で性が鄙しい爲に、出世する路がないので悲しんでゐる。殊に生命の長短の如きは、業に繫がれて云何ともすることが出來ない。(八)彼の悉多太子の必ず佛となられることを豫知しつゝも、それまで生きて

居ることが出來ぬことを知つた、阿私陀仙人の悲しみの如きは、云何ばかりであつたであらう。故に如來は、「我國にありては、各その求むるこころに應じ、願を滿足せしめやう」この願を立てゝ之を成就したまうたのである。

下　衆生世間の觀察

衆生世間を觀察するにまた二つに別れる。一つは阿彌陀如來の莊嚴功德を觀察すること、二つはかの國の菩薩の莊嚴功德を觀察することである。

さて『衆生』といふ字義に就いては、ある論師は迷の世界を廻り、衆多の生死を受くる故に、衆生と名づくと解してゐる。この說に依れば、今佛や菩薩を衆生と名づくるは不都合に思はれる。然し經に依れば、一の法にも多くの名があり、一の名にも無數の意味があると說かれてある。されば衆生といふ名も唯だ一つの意味しかないものではない。かの衆多の生死を受くるから衆生といふ解釋のごときは、*小乘家で迷の世界の衆生の名を說明せるに止まるもので、*大乘家の解釋はまた別にある。卽ち『不增不滅經』には、『衆生とは卽ちこれ不生不滅の義』と說いてある。何故なれば、若し生といふことがあらば、生の上にも生ありて窮まりなかるべく、若し生の上に生といふことが無いといふならば、却つて不生にして生ずるといふことになるであらう。故に無生であらねばならぬ。また若し生あらば滅があらう。併し既に生なければ滅がある筈がない。故に無生無滅、これ衆生の意味である。今衆生世間といふのは、この意味でいふのである。

九　身口二業功德

『み如來の姿は
光の中に輝き
妙なるみ聲は
譬き聞えざる處なし』

佛身に就いて、『觀無量壽經』には、『諸佛如來はこれ法界の身であつて、あらゆる衆生の心想の中にそれ自らを現はされるからである。それ故に汝等、心に佛を想ひ浮べまつる時に、この心が直ぐに

三十二の相好と八十二のこまかな相好とを圓かに具へさせられる佛のすがたである。この心が取りも直さず佛となるのである。この心を離れて佛は在さぬから、この心がこれ佛である。まことにかの海のやうに廣い智慧の佛達は、衆生の心想の世界から生れて來るのである』と說いてある。この經說は云何なる意味であらうか。

案ずるに「身」とは「集まりて成る」を意味し、「界」とは事業の別であることを意味する。例へば眼界の如きはその神經と對象と距離と明りとを見むとする意志との、五つの因緣の集まりより生じ而して但だ見る見らるゝるといふことは但だ自己の緣內で行はるゝことであつて、他の緣內には行はれない。（卽ち聞くとか、聲とかいふことは、眼界では行はれない）事業が別であるからである。耳、鼻等の界も同じことである。今、如來はこれ法界の身であるといふのは、法界はこれ衆生の心法である。衆生の心は能く世間、出世間のすべての法を生ずる。故に衆生の心を法界と名づくる。この法界は能く如來の相好身を生ずることは、恰も色等の能く眼識を生ずるが如くである。故に佛身を法界身と名づくる。かくして佛身は唯だ法界に於ける因緣身なるが故に、他の緣の內には現はれない。故に一切衆生の心想中に入ると說かれたものである。また心、佛を想ふ時、この心卽ちこれ三十二相の身であるといふのは、衆生心に佛を想ふ時に當りて、佛身の相好が衆生の心中に顯現すること、恰も水清ければ色像現はれて、水と像と一でもなく異でもないやうなものである。故に佛の相好身卽ち心想と說かれたのである。またこの心佛と作ると言ふのは、心能く作佛することと、この心これ佛とは、心の外に佛ましまさずといふことである。譬へば、火は木より出で木を離るゝことが出來ず、木を離れないから、則ち能く木を燒く、そして木は火の爲に燒かれて木が卽ち火と爲るやうである。如來の正知の海は心想より生ずるとは、正遍知とは、眞正に法界の如く知ることである。法界は無相なれば如來に知はない。知なきが故に知らざるところがない。知なくして知るは正遍知である。この知は深廣にして測るべからざれば、海と譬へたのである。

十心業功德

『御心は大空のごとく
何物をも距て給はじ』

佛、もこ此莊嚴を興し給へるわけは、現實の世に法を說く時には、佛も黑白、善惡、上下を明らかにせねばならず、こゝに無量差別の法の生ずるは止むを得ぬことながら、また佛の心に分別あるやうに思はしめる。それでこゝに願を起して、我、佛となる時には、地の輕重を別たず荷うが如く、水の惡草瑞草の擇びなく潤すごとく、火の芳しきも臭きも一樣に成熟せしむるが如く、風の眠れる者にも覺めたるものにも距てなく、吹くがごとく、空のすべてを包容して、開き塞ぎの念ないやうにこ期せらるゝのである。この距てなき心が內に獲得せらるれば、自然に外、衆生を安んずることが出來るこれ卽ち虛にして往き、實にして歸るもので、分別の心はこゝで息むのである。

十一　大衆功德

「もろ〳〵の菩薩等は
淨き智慧の海より生る」

或る佛は說法し給へども、來り會する大衆の根性は種々である爲に、佛の智慧に不徹底なものや全く知らぬのがある。隨つて大衆は不平等で純淨でない。故に如來は願を興して、我、佛こ成る時には一切の大衆は、みな如來の淨き智慧の海より生ずるやうにこ期し給ひた。海こいふのは、佛の一切に明かなる智慧は、深く廣くして涯しなく、其處には小乘雜善の死尸を宿さぬから、これを海こ譬へたのである。これらの大衆は、かく大乘の根性を成就して、動かすべからざる願をもつが故に、また不動の聖衆こも名づくるのである。

十二　不虛作住持功德

「如來の願力を觀ずるに
遇ふ者は空しく過ぎじ
大なる功德の寶を
速かによく滿たさしむ」

佛、もここの莊嚴を起し給へるは、ある佛を見るに、但だ聲聞弟子のみありて佛道を求むるものが

ない。或は佛に値ひながら惡道を免れ得ざるものすらある。例へば釋迦佛に於ける善星・提婆達多・居迦離等の類である。或はまた佛の名を聞き、無上道を求むる心を發しつゝも、惡しき因緣に遇うて退轉するものもある。かく空しく過ぐるもの、退轉するものあるを見て、佛は願ひ給うた。「願はくば我佛となる時、我に遇うものは皆速かに、無上の大寶を滿足せしめやう」と。

十三　菩薩莊嚴功德

已上で佛の莊嚴功德は終つた。それで已下は菩薩の功德を觀察するのである。明君があれば、また賢臣がある。堯舜が無爲にして天下を治めしもこれが爲であつた。若したゞ如來法王のみで、大菩薩の法臣として翼讃せらるゝことが無いならば、圓滿の世界と言ふことが出來まい。されば經には、『阿彌陀佛の國には、量りなき大菩薩がある。卽ち觀世音・大勢至等であつて、いづれもやがては、他方に於いて佛となるべき菩薩である』と說いてある。

然るに功德を受け樂しむ者は、海の流れを呑むがごとく、足れりとするの心あるべきでない。その適例は釋尊である。釋尊は或時、一人の盲比丘が、「あゝ誰れか功德を愛し、私の爲に針に糸を通してくれる者はないか」と言つた聲を御聞きになりて、其の比丘の處へ御出でになり、「私は福德を愛する」と仰せられて、針に糸を通してやられた。その時盲比丘は、釋尊の御聲を聞いて驚喜しつゝ白すやう、「世尊、世尊の功德はまだ滿たされぬのでせうか」。釋尊は答へ給うた。「私は功德圓滿して缺けては居らない。併し私のこの身は功德より生じたものであるから、功德の恩分を知つてゐる。それで功德を愛すると言つたのだ」と。今も佛の功德を觀じたゞけで、願は充されぬことはないが、更に菩薩の功德を觀ずるのは、同じ意味からである。

『安樂國は淨くして
そこに在す菩薩等は
穢れなきみ法を說きて
常に衆生をぞ救ひます』

量りなき大菩薩達は、淨土を動かずして、徧く十方に現はれ、種々の機に應じて、實の修行しつ

つ常に佛事をなすことである。恰も天上にある日の、影を百川に現はすやうなものである。日が永上に來るのでない。が又來ぬものであることも言へないであらう。『大集經』には、『譬へば人よく堤を治めて、その宜しき量水を放つ時は、心力を勞せぬやうに、菩薩も亦た先づ一切の佛を供養し、一切の衆生を敎化すべき種々の堤を治すれば、三昧に入り、身心を動かさずして、實の修行しつゝ常に佛事をすることが出來る』と說いてある。實の修行といふのは、常に修行しながら修行するといふことのないことである。

『菩薩は願ぎらく
「若し世界に佛法なからむものあらば
我はその世に生れてぞ
如來の如く法を說かん」と』

心弱き菩薩は、但だ佛の國に修行することをのみ思うて、慈悲堅牢の心がない。故に佛は願を興して、「我、佛と成る時には、我が國の菩薩はみな慈悲心勇猛に、堅固なる志願ありて、敢て淨土を捨て、佛法僧なき處に至り、佛法僧を住持し、莊嚴して、それを絕えないやうにするやうに」と誓はれた。だから今の菩薩の願は、卽ち佛の願の成就せるものなのである。

第五章　廻向の偈

『我はかく願生の偈を誦しぬ
願くば彌陀を見たてまつり
普ねく衆生と共に
安樂國に往生せん』

これは論主が、己の功德を普ねく衆生に施して、共に阿彌陀如來を見たてまつり、安樂國に生ぜんと願はるゝ廻向の偈である。

問。天親菩薩が今「普ねく衆生と共に」と言つて居らるゝ。その衆生といふのは什んな種類のものであらうか。

答。王舍城にて說かれし『無量壽經』に依るに、『佛、阿難に告げたまふやう、「恒河の砂のかずほど

の限りない十方世界の佛たちは、みな共に無量壽佛の不可思議の功德と力とを讃めたゝへらるゝ。あらゆる人々が無量壽佛のみ名を聞いて、せめて一念でもこのみ佛を信じ喜び、—この心は無量壽佛の眞實心から與へ給ふ所である—かの國に生れたいと願へば、立ちごころにかの國に生るべき利益を得て、ほとけとなるに定められる」。但し父を殺し、母を殺し、聖者を殺し、僧侶の和合を破り、佛身を害ふといふ五つの罪を犯したものと、佛の教を謗るものとはこの限りでない』と。この經文を案ずるに、一切の信ある凡夫人は皆往生を得るのである。また『觀無量壽經』に依れば、往生には九品ありその下々品の生は『若し衆生あつて惡業である五逆十惡を造り、不善のありたけを盡すとする。かやうな凡愚なものは、その惡業のむくいによつて、苦惡の世界に沈み、永久に流轉の苦しみを受けることと窮まりなかるべきである。所がこの凡愚なものがまさに命を終らうとする時、たま〳〵善き知識が來て、種々に慰め、ために妙なる御法を說いて佛を念ぜしめる。しかも、この人は苦しみに逼められてゐるので、敎へるやうに佛を念ずるの餘裕がない。このさまを見た善き友は更にすゝめて「おん身が若し苦しさの餘りに心をしづめて佛を念ずることができないならば、せめて無量壽佛のみ名をとなへるがよい」といふ。よつて遂に一心に聲をつゞけて、南無阿彌陀佛と十聲となへたとする。するとそ

のみ名をこなへた功力によつて、一聲々々の中に八十億劫の長い間の生死の罪が消え失せ、いよ〳〵命の終るその時には、金色の蓮華が日輪のやうにその人の前に現れるのを見る。そして一念の間に極樂世界にいたり、蓮華の中に包まれて居ること十二大劫の後、華が開けて、觀世音、大勢至の二菩薩が大悲の音聲を以て、廣く現象卽實在の眞理、罪を除きほろぼす方法を示させられる。これを聞いて大に喜び、卽座に道を求める心を發すのである。これが下品下生の人達である』と說いてある。此の經に依つて、下品の凡夫も、たゞ正法を謗らざる限り、その信仰の因緣により皆往生することが出來ることは證明せらるゝ。

問。『無量壽經』では往生を願ふ者は皆往生することが出來る。唯五逆と正法を謗るものを除くと說き、『觀無量壽經』では、五逆十惡を作り、あらゆる不善を具ふるものも亦往生が出來ると說いてある。二つの經は互に矛盾するものではなからうか。

答。『無量壽經』では二種の重罪が具はつてゐる。卽ち五逆と、正法を謗ることである。その二種の罪があるから往生が出來ぬ。然し『觀無量壽經』では、但だ十惡五逆の罪を作るものといつて、正法を謗ることが擧げてない。それで正法を謗らぬから往生が出來るのである。

問。もし人、五つの逆罪を具へながら、正法を謗らぬ爲に往生が出來るならば、こゝに唯だ正法を謗るのみで、五つの逆罪を作らぬ願生者あらば、その人も往生することが出來るであらうか。

答。正法を謗る者は、更に餘の罪なくとも往生することは出來ぬ。(一三)經說に依れば、五逆　罪人は無間地獄に墮ちて此の世界の滅ぶるまで苦を受ける。正法を謗る人は無間地獄に墮ち、この世界滅ぶれば、他方世界の無間地獄に轉じつゝ、かくして百千の無間大地獄を經過すること說いて、何時地獄を出ることいふことを記してない。これ卽ち正法を謗るの罪、極めて重いからである。また正法とは卽ち佛法である。この愚人、既に佛法を謗つてゐる已上、佛土に生れむと願ふ道理がない。もし假りに安樂な處を貪る心から生を願ふことありとしても、それは水でない氷、烟のない火を求むると同樣であつて、全く不合理のことゝ言はねばならぬ。

問。正法を謗ることは什んなことか。

答。佛なく佛法もなし、菩薩もなければ、菩薩の法もなしといふ見解を自ら心に領解し、若しくは他から敎へられてさうと決定する、それを正法を謗ると名づくるのである。

問。それは唯己れに關することで他の衆生に何等の苦惱をも與へはしない。それが何うして、五つ

の逆罪よりも罪が重いのであらうか。

答。もし佛、菩薩が世間の道、悟りの道を說いて衆生を敎へらるゝことがないならば、誰れか仁・義・禮・智・信あることを知るものがあらう。かくては世間の一切の善法は斷え、悟に至る一切の賢聖の道も滅ぶることゝなるのである。問者は唯五つの逆罪の重いことをのみ知りて、その五つの逆罪の正法の無いこころから生ずることを知らぬのである。この理を知らば、正法を謗る人のその罪云何に重きかゞ知らるゝであらう。

問。『業道經』には、『業の報は秤のやうに、重い方から先きに牽く』と言つてある。然るに『觀無量壽經』では五逆十惡を造り、あらゆる不善を具へ、當然惡道に墮ちて長き時の間、量りなき苦を受くべき人も、命終の時、善知識に遇うて南無無量壽佛を稱へよと敎へられて、一心に聲を絕たず十念を具足すれば、安樂淨土に往生することが出來て、卽ち大乘正定の衆に入り、遂に退いて惡道に墮つる事なく、長へに惡道の苦を免るゝ」といふことを說き給ふ。さらば重き方から先に牽くといふ意味を、こゝでは何う領解すべきであらう。始めなき時の昔より、あらゆる業を作つて來てゐる。その穢れある身心は迷の世界に繫がれてゐる。然るにたゞ十念、阿彌陀佛を念じて迷の世界を離るゝことが出來ることせば、業に繫がるゝといふ事實は何うなるのであらうか。

答。問者は五逆十惡の業に繫がるゝことを重いと思ひ、下々品の人の十念を輕いと考へて、その重い罪の爲に十念の人も先づ地獄に墮ちねばならぬと想ひ定めてゐるらしい。それ故今こゝで兩者の輕重を比較して見やう。蓋し輕重といふことは、「心」と「緣」と「決定」とによりて定められるのであつて、時の長短多少によりて定められるのではない。

「心」によることは、彼の逆罪は誤れる見解より生じたものであり、此十念は善知識の敎へにより眞實の法を聞ける（心）より生じたものである。されば一は實で、一は虛であるから、比較にも及ばぬのである。恰も千歲を經たる闇室も光至れば直ちに明朗となるやうなものである。暗は室に千歲もあつたのであるから、一時の光では容易に去らぬといふやうなことは何うして言へやう。

「緣」に依ることは、彼の罪を造れる人は、自ら妄想心に根據し、煩惱虛僞の衆生を緣として生じたのであり、この十念する者は、無上の信心に根據し、阿彌陀如來の淨き眞實の功德に莊嚴されし名號を緣として生じたのである。譬へば毒の矢に當てられた人は、その爲に筋は截られ、骨は破らるゝも若し滅除藥の太鼓の音を聞けば、矢は拔けて毒が消えるやうなものである。（『首楞嚴經』に、『譬へばこゝに藥がある。それは滅除

と名づけられるものである。若し戰鬪の時、この藥を鼓に塗れば、鼓の音を聞く者の箭は拔けて毒は除かるゝやうに、菩薩もまた首楞嚴三昧に入り、その名を聞かば、三毒の箭は自然に拔け出る』と說いてある。）この場合何人も彼の矢は深く、毒は烈しいから、太鼓の音を聞いても、矢が拔け、毒が消えぬといふことが出來ない。

「決定」に依るとは、この造罪は餘念によりて繼がれ距てられる心によりて生じたものであり、この十念は餘念によりて繼がれ距てられない心によりて生じたものである。已上の三つの意味を期ふるに十念の方が重いことは明かである。されば重き方から先づ牽いて迷の世界を離れるのは、勿論のことであつて、この二つの經文には少しの矛盾もないのである。

問。一念といふのは何程の時間であらうか。

答。通例百一の生滅を一刹那と名づけ、六十の刹那を一念といふ。併し今こゝに念といふは、この時間をいふのではない。たゞ阿彌陀佛を憶念して、その全體或は部分を觀じ、心に他の想なく十念相續することを十念と名づくるのである。名號を稱へる場合も同樣である。

問。もし心が他を想へば、これをひき還らしめて念の多少を知ることが出來やう。併しその代りには念に距が生ずる。と言つて若し心を凝らして一事を想へば、何うして念の多少を知ることが出來やう。されば十念といふことは云何にして知ることが出來やうか。

答。經に十念といふのは、業の成ることを顯はすもので、必ずしも頭數を知らねばならぬのではない。蟬は春と秋とを識らぬと言ふも、それは夏を知つてるといふことを意味しない。（既に春と秋とを知らねば、また夏を知る筈がないから。）それは唯だ知る人が蟬は春秋を知らぬと言ふだけである。業が成るといふことも、これまた精神を見透すものゝ言である。であるから唯だ念を凝らし、相續して他を想はざればよい。また何の暇ありてか念の頭數を知る必要があらう。

下卷　論の解釋

第一章　願生偈の大意

論文は十章に別たれる。即ち(一)願生偈の大意を述べ、(二)五念門の行を觀知して信を生ずべきを示し、次に(三)詳かに淨土の體相を觀察するに、(四)そは畢竟如來願心の莊嚴に依ることを說き、更に(五)觀察の方便により衆生を攝化する相を展開して、(六)其處に菩提の障を離れ、(七)菩提の道に順ふことを示し、(八)智慧と慈悲と方便との名と意味とを明かにし、こゝに(九)願行は成就して、(一〇)自利と利他との道は滿足せらるゝことを說くのである。而してこの第一、願生偈の大意は論文に、

『この願生の偈は、かの安樂國を觀、阿彌陀佛を見たてまつり、その國に生れむこの願を表白したものである』

といふ說明で充分に現はれてゐる。

第二章　觀知して信を生ずること

五念門に就いては、先づ五念の力を示し、次ぎにその名を列ねてある。その五念の力を示すといふのは論文に

『若し信ある人々にして、五念門の行を修むるならば、必ず安樂國に生じて、かの阿彌陀佛を見るを得るであらう。』

といふ言葉である。次にその名を列ねるとは、論文に、

『五念門とは、一禮拜門　二讚嘆門　三作願門　四觀察門　五廻向門』

といふものがそれである。『門』といふのは入出を意味する。人は門によりて入出するに碍なきやうに、前四念は安樂淨土に入る門であり、後の一念は慈悲もて敎化に出づるの門である。

『禮拜とは、身を以て阿彌陀如來を禮拜し、かの國に生れたいといふ意に住する事である。』

如來の德は無量である。德無量であるからその德を現はす名も亦無量である。されば悉くそれを

說き現はすことは、紙筆の及ぶこころでない。故に經には多く十名を擧げて總ての代表としてある。今その中殊に重要なる如來の名を說明しやう。『如來』とは法の如く解り、法の如く說き、*涅槃界より來りて迷の中に去らない。それで如來と名づける。而して論に『この如來を禮拜してかの國に生れたいといふ意に住す』と說いてあるのは、菩薩の法として、常に晝三たび夜三たび十方の一切諸佛を禮拜するが、それは必ずしも願生の意あるものでない。けれども今阿彌陀如來を禮拜するのは、常に願生の意を爲して〻あることを明かにせられたのである。

『讚嘆とは、語を以て彼の如來の名を讚め歎へて、かの如來の智慧の光の如く、またかの御名の意味に相應して、修行したいと欲ふことである』

『讚嘆』とは、讚は讚め揚げることゝ、嘆は歌ひ歎へることである。この讚嘆は必ず語ですべきであるから、口業である。『かの如來の智慧の光の如く』といふのは、佛の光明はこれ智慧であることを現はすのである。この光明は十方の世界を照らすに、何物も碍ぐるものはない。よく十方衆生の無知の黑闇をも除くことは、かの日月の光のた〻空所の闇を破るに超えすぐれてゐる。『またかの御名の意味に相應して、修行したい』といふことは、かの無碍光如來の御名は、能く衆生のあらゆる無明を破り、能く衆生のあらゆる志願を滿たすのである。然るに稱名し、憶念しながら、無明もあり、志願も滿たされずに居ることのあるのは何故であるかといふに、それは眞實に修行せぬ爲に、その稱名憶念が御名の意味と相應せぬからである。それでは眞實に修行せぬ爲に、御名の意味と相應せぬといふことは什んなことであらうか。それは如來は實相の身である、爲物の身であるといふことを知らぬことである。また相應せぬといふことに三種ある。一には信心が純でない。あるが如くなきが如くである。二には信心が一でない。決定して居らぬのである。三には信心が相續しない。疑の心が間に入るのである。この三句は相互に理由となる。卽ち信心が純でないから決定がなく、決定がないから相續しない。また念が相續せぬから決定の信を得ない、決定の信を得ないから心が不純である。これに反するものは眞實の修行で、御名に相應するものである。それ故論主も偈の建に『我、一心に』と言はれたことである。

然るにこゝで問題となるのは、名は法を指すものであつて、法そのものでない。それは恰も月を指す指の如きものである。それ故若し佛の名を稱へて願が滿たされるならば、月を指す指が闇を破ると

いふと同じ不合理でなからうかといふことである。併しこれは一概に言へぬことで、名が直ちに法そのものと一つであることもあれば、また名と法と別の場合もある。前者は諸佛諸菩薩の名や、*般若波羅蜜の章句や、經の*陀羅尼等であつて、かの世間の呪言の如きも之に屬するものと見て善いであらう、後者は卽ち月を指す指の如く、名は單に法を指示するに過ぎぬのである。

『作願とは、一心專念に、必ず安樂國土に往生して、本當の止の行を修めたいと、心に常に願ふことである』

『止』といふは奢摩他の譯語である。それは心を一所に止めて惡をせぬといふ意味である。然るに奢摩他を止と譯することは、誤つては居らぬが嚴密ではない。何故ならば、心を鼻端に止むるといふ時でも止と言へるし、また不淨を觀て貪りを止め、慈悲の心によりて瞋りを止め、因緣を知つて愚癡を止むるのも止と言はれる。更に又人が行かうとして進まぬときも止と言はれるからである。かくて止といふ言葉は餘りに廣い。今奢摩他を止といふのは、唯次の三つの意味である。一には一心に阿彌陀如來を專念して彼國に生れやうと願へば、この如來の名と及び彼國土の名とが能く一切の惡を止める。二には彼の安樂國は迷の世界に超え勝れてゐるから、もし人かの國に生るれば自然に身と口と意との惡が止まる。三には阿彌陀如來の覺にて支持せらるゝ力が、自然に獨悟者になりすまそうといふ心を止める。已上三種の止は、如來の眞實の功德から生ずるのである。それで『本當の止の行を修めたい』といはれるのである。

『觀察とは、智慧を以て正しく彼の國を觀察し、眞實に「觀」の行を修めんと思ふことである。』

『觀』は毘婆舍那の譯語である。この觀といふ語も多少廣過ぎる嫌はあるが、今「觀」といふのは次の二つの意味である。一には此で想を起して彼國の三種莊嚴の功德を觀るに、かの功德が眞實であるから、隨つてこの修行者も亦眞實の功德を得ることである。その眞實の功德とは卽ち必ず彼國に生るゝことが出來ることである。二には彼淨土に生るることが出來るならば、そこで阿彌陀佛を見、未だ淨心を證得せざる菩薩も、必ず平等の法身を證ることが出來て、*淨心の菩薩と同一なる寂滅の境地に到ることが出來る。それで『眞實に觀の行を修めんと思ふ』と言はるゝのである。

觀察には三種ある一は彼の佛國土の莊嚴功德を觀察すること、二は阿彌陀佛の莊嚴功德を觀察する

ここ、三は彼の諸〻の菩薩の莊嚴功德を觀ずることである。心をその事に關係づけるのが觀である。觀の心が明かになつたのが察である。

『廻向とは、惱める人々を捨てず、廻施を第一として、大慈悲の心を成し遂げやうと、心に常に願ふことである。』

廻向には二方面がある。一つは往相、二つは還相である。往相といふのは、己の功德を一切衆生に廻施して、共にかの阿彌陀如來の安樂淨土へ往生せんと願ふことである。還相とは彼の國に生れをはり、「止」「觀」の方便力が成就して、生死の林に還り入り、一切衆生を敎へ導きて、共に佛道に向ふことである。然るに往にせよ、還にせよ、衆生を救ふて生死の海を渡らうとすることであるから、『廻施を第一として、大慈悲の心を成し遂げんとす』と言はれたのである。

第三章　淨土の體相の觀察

この章には二つの體を說く。一つは器體、二は衆生體である。器を說くに三段あり。一は國土の體相、二は自利々他のこと、三は第一義諦に入ることである。國土の體相とは

『かの佛國土の莊嚴は、不可思議力を有つてゐること、恰も摩尼寶珠の如くである。』

『不可思議力』といふのは、彼の佛國土の種々の莊嚴功德の力の思議することの出來ぬことをいふのである。經には總ての不可思議を五種に統てある。一には衆生の數の不可思議、二には業力の不可思議、三には龍の力の不可思議、四には禪定の力の不可思議、五には佛法の力の不可思議である。今、佛土の不可思議には二つの力がある。一は業力、卽ち法藏菩薩の世に超えたる善こと、大願業の力で成れるものである。二は覺者、阿彌陀如來法王の善く住持さるゝ力である。卽ちこの力が種々の莊嚴に攝めてゐるのである。『恰も摩尼寶珠の如し』といふのは、譬を以て安樂佛土の不可思議の性を示さるゝのである。過去の佛が涅槃に入らせられた時、方便をもて舍利を留めて衆生に惠まれた。然るに衆生の福が盡きると舍利は變化して摩尼如意寶珠となつた。この球は多く大海の中にありて、大龍王が首

飾としてゐるといふことである。それで若し四海を統一すべき大王が世に出づる時には、慈悲の德としてこの珠を得、世界中に大なる惠みを爲すのである。卽ちこの寶珠は大王の意のまゝに、衣服・飲食・燈明・樂具の類を雨ふる如くに出すのである。これに依りて大王は天下中の人々の願を滿たしてやることが出來るのである。安樂佛土もこれと同じやうに衆生のすべての願を滿たすので、この寶珠を譬にせられたのである。併し譬は唯だ似てゐるといふまでゝ、實を言へば、彼の寶珠は衣食等を求むる者に對して衣食等の物を出すのであつて、求めぬものには現はれない。されど彼の佛土は性の自然として衆生を滿足せしめる。またかの寶はたゞ衆生に衣食等の願を起さしめるが、衆生に無上道の願を與ふることが出來ぬ。また寶はたゞ或る衆生の願を滿たすのみで、總ての衆生の願を滿たすことは出來ない。

かの佛の國土の莊嚴功德を觀察するに、そこには十七種の功德がある。

一　清淨功德　　二　量功德
三　性功德　　四　形相功德
五　種々事功德　　六　妙色功德
七　觸功德　　八　三種功德
九　雨功德　　一〇　光明功德
一一　妙聲功德　　一二　主功德
一三　眷屬功德　　一四　受用功德
一五　無諸難功德　　一六　大義門功德
一七　一切所求滿足功德

清淨功德『かの如來の世界を觀るに、總てうつし世の相に超ゆ』。

彼の淨土へは、煩惱の缺くる無き凡夫さへも生るゝことが出來て、うつし世の業に繫がるゝことがない。卽ち煩惱を斷たずして涅槃の分限を得るのである。誠に不思議である。

量功德『究まりなきこと大空の如く、廣大にして邊もあらじ』。

この功德の不思議なることは、若し彼國の人々が、千間・萬間・乃至百里・千里の宮殿や樓閣あらむ

こと望まば、心のまゝになる。また十方世界の願生者が、已に生れ、今生れ、當さに生るゝこと、一日一時の間でも數限りなく、その多少を知ることも出來ぬ程である。しかも彼の世界は大空の如く、少しも狹小の相がない。衆生はこの大なる世界にありて、志願の廣大なること、亦大空の如く限りがないことである。卽ち彼の國土の量が、よく衆生の心の量を成すのである。

性功德『大なる慈悲の心の、穢なき善より成る』。

恰も迦羅求羅といふ蟲の、本來は極めて微小なるが、若し大風に逢へば大山の如き身となり、風の大小に隨ふ身相と爲るやうに、彼の國土に生るゝ衆生も彼の世界に生るれば、やがて穢れなき善に滿ち、正定の聚に入るのである。卽ち彼の風が蟲の身でなくて、しかも身となること同樣である。誠に不思議のことである。

形相功德『物みなは光に滿ちて、日月の輝くにまがふ』。

瞋るものは醜き姿となり、忍ぶものは端正となる。これ我が心の影であり、現れである。然るに一たび彼の國に生るゝものは、瞋りと忍とを問はず。人々の色も像も妙にして差別がないのである。これ蓋し彼國の淨き光の力である。かの光は心でなくて、心と同じ事をすること、不思議の至りといはねばならぬ。

三種功德『千萬の華は、池の水際を覆ひ、微風吹き渡れば、光は華と入り亂る。宮殿のもろ〳〵の樓閣は、十方を觀るに碍りなし。金鈴響き妙にして、み法の樂を奏でたり』。

水と地と虛空とを一つにせられたのは同類であるからである。卽ち地・水・火・風・空・識といふ六大元質の中ではこの三は同類であり、また地・水・火・風・空を無分別のものとして枚擧する場合にもこの三は同類である。併し識大は衆生に屬するもの、火大は淨土には無く、風大はあれども見ることが出來ぬものである。それ故六大・五類の中にて國土の莊嚴としてあるものは唯だこの三種のみである。

『大經』に說き給ふやう。『かの國のもろ〳〵菩薩聲聞が、もし寶の池に入つて、足まで沒さうと欲へば水はすぐに足を沒し、膝まで沒さうと欲へば膝まで達する。腰までと欲へば腰まで、頸までと欲へば頸までくる。また身に灌ぎたいと欲へば自然に身にそゝぐ。水をもこの通りにしたいと欲へば、すぐ

もこのやうになる。そして冷たさ、暖かさよろしきに適ふて、思ふまゝに自然に身に適する。一度、この水に浴すること、身も心も爽かになつて、心の垢は除かれてしまふ。その水は清く澄みこほつて、有るか、ないかわからぬ程で、寶の沙が冴へ渡つて、深いところも照らさぬこいふことはない。さゞ波がめぐり流れて互に灌ぎ合ひ、しづかに、ゆるやかに動いて、遲くもなければ、疾くもない。時にさまゝ〳〵の波が立つて、天然の妙なる聲が起り、のぞみに隨つて、什んな聲でも聞かれぬことはない或は佛の聲、法の聲、僧の聲、寂靜の聲、すべてのものは空であり、無我であるこいふ聲、大慈悲の聲、菩薩の行の聲、或は佛の十種の智慧力、畏るゝ所なき四種の相、十八種の特別の法の聲、もろもろの不思議な力の聲、作すべき修行のないこいふ聲、起すべき善も、滅ぼすべき惡もないこいふ聲眞理に安住せる聲、乃至菩薩の聲なゞ、もろ〳〵の妙なる御法の聲が聞かれる。これらの聲は聞きたいこ思ふものゝ心のまゝで、聞く人の心に限りなき歡喜を覺えしむる。その聲を聞いたものは清淨さ欲を離れること、寂滅こいふやうな眞實のこゝはりにかなひ、また佛や、法や、僧や、佛の特別の法にかなひ、佛に成る行や、菩薩や、聲聞の修める道にかなふ。まこゝに無量壽佛の國には地獄、餓鬼畜生の名まへすらなく、たゞおのづから快樂の音ばかりである。それゆへ、その國を極樂こ名づけるのである』こ。これ卽ち水が佛事を爲すもの、誠に不思議である。

また地功德の不思議なることは、かの地上の總ての莊嚴は明鏡のごとく、十方國土の善惡の業緣、淨きこ穢れたるこの一切の相を、悉く現はし、彼國の人々をして惡を避け、善に進むに容易ならしむるのである。また大菩薩は「法性を照らす寶」を冠こして、その寶冠の中に諸佛を見、また一切の法の性を了達せらるゝ。かの『法華經』を說き給ひし時、釋尊は眉間の光を放ちて、東方、萬八千の世界を照らし給ひしに、それらの世界は皆金色こなり、下は地獄より上は有頂天にいたるまで、その中に生死しつゝある衆生の善惡の業緣、果報の好酬が悉く現はれたこいふが如きは、この功德の類こ言ふべきであらう。

虛空功德に就いては、『大經』に謂く、『いろ〳〵の寶から出來た網が空一ぱいに覆はれ、それが皆黃金の糸や、眞珠や、その他珍しい妙なる百千種の寶で飾り立て、網の四方には限なく寶の鈴が垂れてゐる。その光りかゞやいて麗はしいこは實に美しさの極みである。また自然の風がしづかに起り、微かに動いて居る。その風は寒からず、暑からず、柔輭で、遲くもなければ、疾くもない、調和の風である。もろ〳〵寶の網や、寶の樹を吹くこ、量りない妙なる法音が流れ出て、萬種のゆかしい德香

が薫じわたる。その法音を聞き、その香りをかげば、おのづから煩悩や、心の垢はなくなる。風が身に觸れるこ、皆快樂を得る』こ。これ實に不思議の德である。

妙聲功德『如來の國の名を聞く者は、深き悟をぞ得む』。

（一五）經說に依れば。『もし人、たゞ彼の國土の安樂の穢れなきを聞き、己れ忘れて願生すれば、また往生することが出來て正定の聚に入る』こいふことである。されば、これ卽ち、國土の名が佛事を爲すもの、誠に不思議のことである。

主功德『そは覺者彌陀の、法王こして住持し給ふこころなれば』。

元來阿彌陀佛それ自身が不可思議にましませば、この彌陀の善力に依りて住持せらるゝ安樂國土も亦不可思議である。住こは異變せず、壞滅せざること、持こは散せず、失せざることである。恰も不（一六）朽藥をもて種子に塗れば、水に置くも爛れず、火に入れても焦げず。何時でも芽生える性を失はぬやうに、若し人、一たび安樂淨土に生るれば、その後、迷の世界に生れて衆生を敎化しやうこ願ふ時願のまゝ生れることが出來、しかも迷の世界の水火の中に入りても、決して菩提の種子を朽ちしむることはない。何故なれば、覺者阿彌陀が善く住持し給ふからである。

眷屬功德『その覺者の御坐より、聖者は生れ』。

この現前の世界では、胎を以て生るゝの、卵にて生るゝもの等ありて、その眷屬の多少も定まらず、苦樂も樣々である。それ皆業がまち〳〵であるからである。然るに彼の安樂國土における人々は、皆阿彌陀如來の覺の御坐より生れぬものはない。それは同一に念佛して別の道がないからである。之を廣い意味に取れば、此の世における念佛者も彼國の聖者達も皆兄弟こ言へやう。誠に不思議である。

受用功德『佛法の味にしたしみ、禪三昧を糧こすぞすなる』。

彼の國の人々は米穀によらずして命を保つこいふことは、云何にも不思議なことではあるまいか。何うしてそれが出來るのであらう。恐らくこれ如來の本願の力であらう。彼國の聖者は卽ち如來の本願を以て我が命こするのである。

無諸難功德『身心の惱は長へに離れて、常に樂しみを受く』。(一七)

經には「身はこれ苦しみの器、心は惱みの端」と說いてある。然るに彼の國土は不思議にも、身ありながら、常に樂みを受くるのである。

大義門功德『人々は皆道に眼覺めて、こゝには譏の名だにもなし』。

淨土の果報として二種の譏を離れる。二種とは體と名である。體にはまた三種ある。二乘と女と不具者とである。この三がないのを體の譏を離るといふ。名にもまた三種ある。卽ち三種の體がないだけではなく、また二乘や女や不具者といふ三種の名さへもないのである。これを名の譏を離るゝといふ。卽ち淨土の人々は、皆平等にし差別の相がないのである。これは又云何に不思議なことであらうか。彼の天人は同じ器で同じ食物を取りながら、その福分によりて食ふ時に食物の色が變るといふことである。また經にはこの娑婆世界を、舍利弗は礫土より成ると見、螺髻梵王は天宮の如く淨しと見たと說かれてある。然るに彼國へ願生するものは、本は三三の品ありたれども、今は一二の異もない。衆流海に入りて一味となるが如くである。こゝに淨土の不思議がある。

所求滿足功德『われらの願は、すべて皆滿たさる』。

彼の國の人々、若し他方の世界の量りなき佛の國々に往き、諸の佛菩薩を供養しやうと欲へば、その願は直ちに滿たされ、而して其の供養の品々も願のまゝになるのである。また彼の安樂國を離れて他の國に生れんと欲へば、その壽命の長短まで願のまゝになるであらう。また自由無碍の心境に至らずして、しかも自由無碍の用と同じことが出來る。誠に不思議である。

自利と利他とのことは

『これらの莊嚴に於いて如來は、自利と利他との大功德を成就し給ふ』

といふ論文に見るべきである。然るに上に說けるものは、彼の淨土の無量の功德を略して彰はせるに過ぎぬ。淨土の德は上述に限らぬとは言ふまでもないことである。また經に須彌山を芥子に入れ毛孔に大海に納むといふことが說いてあるが、これ山や海の德でもなく、毛孔や芥子の力でもない。唯だ大菩薩の神通力である。されば淨土の莊嚴は利他不思議の德を具ふるといふも、かゝる德を國土に成就したる如來も亦、この莊嚴を受け用る給ふ自利の意味あるは明かである。

第一義諦に入るこは

『故に彼の國土の莊嚴は、實に第一義諦なる妙なる境界である』

この論文について知るべきである。第一義諦こいふのは、佛の感得せられたる因緣法である。この第一義諦が卽ち淨土の妙なる境界に具はる意味である。この事は更に下に至りて再說しやう。

さてこゝに作願の次に觀察を說かれし所以を考究せねばならぬ。抑も論の始めには『光、十方に碍りなき如來に歸命して安樂國に生れんこ願ぎまつる』こいふ。然るに生れるこいふことは、元來はこれ迷の本元、諸の煩惱もこれより起るのである。然るに今この世の生を棄てゝ、彼の世の生を願ふならば、この迷の元なる生は遂に盡くることがないではなからうか。この疑問に對して彼の淨土の莊嚴の功德を觀ることを說かれたのである。卽ち之に依りて彼の淨土の生は、これ阿彌陀如來の淸淨なる本願に依る「無生の生」であつて、迷界の虛妄の生こ異るを明かにせんが爲めである。蓋し法の眞性は淨くして無生である。されば生こいふことは、願生するものゝ情に過ぎぬ。生既に無生ならば、あながちに生を盡くすにも及ぶまい。加之飽くまでも生を盡くさうこすれば、却つて進んでは無爲にして能く利他する身を失ひ、退いては眞空はそのまゝ不空なるを知らざるの病から醒むることは出來ぬであらう。これ卽ち大乘の根を破れるものにて、大迦葉が「須らく悲泣して其聲三千世界に振ふべし」こ痛歎せる所である。これらの者は遂に眞實の道に反へることが出來ぬのである。さればこの「無生の生」の理を體こするもの、これを淨土こいふ。その淨土の宅は卽ち上述の十七種莊嚴である。その中、第一の莊嚴は淸淨功德で、淨土の全體を現はすものであり、第二の莊嚴已下は、淨土の功德を細說するものである。この十七種の功德を觀れば、眞實の信を生ずることが出來て、必ず彼の安樂國に生れることが出來る。

然るにこゝで或は「生そのまゝの無生」こ知るこいふこふことは、上品の往生人のことであつて、下々品の人の如きは、唯だ十念々佛して往生するのであるから、恐らく實に生れるこ固執するのであらう。若し然らばその人は往生することが出來ぬか。然らずんば往生して更に惑ひを生ずるからであらねばならぬこいふ疑問が起るかも知れぬ。併しそれは必ずしもさうでない。譬へば淨き摩尼珠を濁れる水に入るれば、水はやがて澄んで來るやうに、長き生死の罪に濁れる人も、かの阿彌陀如來の淸淨なる「無生」の寶珠、卽ち名號を聞いて、濁れる心の中に受け入るれば、念々の中に罪は滅びて心は淨くなりて往生することが出來るのである。又この摩尼珠を色ある布にて包んで水に入るゝこ、水は

その布の色と同じになるやうに、かの佛土には阿彌陀如來の覺の力、卽ち無上の寶珠ありて、これを種々の莊嚴の布に包んで往生人の心水に入れられるから、往生人は自然に「生」の見解を轉じて「無生」の智を得るのである。又これを氷の上に火を燃やすにも譬ふることが出來る。則ち火が盛んになるに隨つて氷は解け、氷が解くるに從つて火は滅するやうに、彼の下品の人は法の眞理の「無生」であることを知らなくとも、佛名を稱へて彼土に生れんと願ふならば、彼土は「無生」の世界であるから、「生」といふ見解の火は自然に滅びるのである。

彼の國の衆生を觀察するに二種ある。卽ち佛を觀ることと菩薩を見ることである。佛を觀ることいふは、佛に次の八種の功德がある。

一　座功德　二　身業功德
三　口業功德　四　心業功德
五　衆功德　六　上首功德
七　主功德　八　不虛作住持功德

坐功德・身業功德等は『觀無量壽經』に依りて、その詳細を知るべきである。

身『如來の姿は、光の中に輝き』
口『妙なるみ聲は、響き聞えざる所なし』
心『御心は大空の如く、何物をも距て給はじ』

凡夫は身と口と意とを以て罪業に耽り、三界に輪廻して窮まりがない。それ故、諸の佛や菩薩は身・口・意の三業を莊嚴し、用て衆生の虛誑の三業を對治せらるゝのである。さればその對治の模樣は何うかといふに、第一に身業については、衆生は身を我と思ひ誤るがために、卑賤の身、醜陋の身流轉の身を受くるのであるが、是等の衆生も阿彌陀如來の光明に輝く身を見ては、かゝる種々の身を受くる業の繫縛から脫れて、如來の家に生れ、差別なき身を得ることが出來るのである。次に口業に就いては、衆生は憍慢の心から正法を謗り賢聖を毀ち、尊長を蔑ろにする。その爲めに當然或は舌を拔かるゝ苦しみ、瘂となる苦しみ、言ふこころ聞かれざる苦しみ、名聲なき苦しみ等を受くべきである。しかもこれらの衆生も、阿彌陀如來の功德に滿てる名、法を說き給ふ音聲を聞けば、自然にそれらの業の繫縛から脫れるのである。而して如來の家に生れ、平等の口業を得ることである。最

後に心業に就いては、衆生邪しまな見解から心に分別を生じて、有無・是非・好醜・善惡・彼此等の種種の差別に固執する。そのため長へに迷の世界に沈み、樣々の分別の苦しみ、取捨の苦しみを受け永劫暗の夜にありて覺むる時がないのである。然るにかゝる衆生も、若し阿彌陀如來の平等なる光の御照らしに遇ひ、或は阿彌陀如來の平等なる願意を聞かば、樣々の意業による繫縛を脫れて、如來の家に生れ、遂には距てなき意業を得るのである。

元來、心は覺知するものである。然るに如來の心業は分別がないのは何故であらうか。これ如來の心の覺知は法の實相と融合するからである。法の實相を覺るの知は、そのまゝ無知（無分別）である。恰も蛇は曲るを性とすれども、竹筒に入るれば直きが如くである。而してまたこの無知こそ、やがて一切智と呼ばるゝ所以である。凡夫の心は知あるがために知らざるところがある。聖の心は無知なるがために知らざるところがない。無知にして知る。その知卽ち無知である。これ一見矛盾のやうであるが、決して矛盾ではない。元來すべての法は樣々の相を現はせども、皆幻の如きものである。されば、こゝに幻の象や馬がありとせば、其處に長い頸や、鼻や、手や、足があるとしても、智ある者は之を觀て象馬等と分別することはせぬであらう。卽ち法の實を知るものは、分別を離るゝのである。

不虛作住持功德『如來の願力を觀ずるに、遇ふ者は空しく過ぎじ、大なる功德の寶を、速かによく滿たさしむ』。

不虛作住持とは虛ならぬ業の力にて、國土を維持するといふことで、その住持するものは、卽ち阿彌陀如來の本願力である。虛の業は何物をも維持することは出來ぬ。故に自分の食を減じて士を養ひながら、その士の爲めに殺されたものや、金を庫に積み置きながら、餓死したといふ類の話が多いのである。これ卽ち得たといふも得たのでなく、有つてゐると言つても有ち通すことが出來ぬ有樣である。これ畢竟虛妄の業なるがために、住持することが出來ぬのである。之に反して不虛作住持といふのは、本、法藏菩薩の四十八願と、今日、阿彌陀如來の自在なる威神力とに依るものである。卽ち願が力を成じ、力が願に從ひ、願は徒に願たるに止まらず、力は虛なる力ではなく、力と願とが相ひ契合して離れない。こゝに不虛作住持の功德は成就する。それ故、彼の佛を見たてまつれば、また淨心を證得せざる菩薩も、必ず平等の法身を證するを得て、淨心の菩薩と同一なる寂滅の境地に至ることが出來るのである。平等の法身といふのは、八地已上の法性生身の菩薩である。寂滅の

境地といふのは、この法身の菩薩の證の内容である。この寂滅の境地は平等であり、それを證るから平等法身といふのである。またこの平等法身の菩薩の證の内容であるから寂滅平等の境と名づくるのである。この菩薩は報生三昧に入り、その禪定の不思議力で、よく一處にありながら一時に十方の世界に遍く遊んで、樣々に一切の如來及びその大衆を供養し、また能く限りなき佛・法・僧のない世界に身を現はして、樣々に一切の衆生を敎へ救ふことが出來る。而してかく佛事を爲しつゝ、往來の想ひも供養の想ひも敎化の想ひもない。かゝる自在の身を平等法身と名づけ、この自在の境を寂滅平等と名づくるのである。未だ淨心を證得せざる菩薩といふのは、初地から七地までの菩薩である。これらの菩薩達も亦よく身を諸の世界に示現すること、百千乃至百千萬億であり、無佛の國土に佛事を施さるゝのである。併しかく佛事を作す場合には注意を集中して、三昧に入つて始めて爲さるゝのであつて、その努力なしには不思議の力を現はすことが出來ぬ。これ未だ淨心を證得せずと言はるゝ所以である。然るにこの未だ淨心を證得せざる菩薩も、安樂淨土に生れ、阿彌陀佛を見むと願へば、その願の如く阿彌陀佛を見る時、上地の菩薩、卽ち既に淨心を證得せる菩薩と、畢竟身も等しく、法も等しくなるのである。龍樹菩薩や天親菩薩が彼國に生れんと願はれたのは、これがためであらう。

さて『十地經』に依れば、菩薩の道に進むやその順序があつて、量りなき功勳と長き時とをもつて淨心を證得するのである。然るに今阿彌陀佛を見る時畢竟して上地の菩薩と身も法も等しくなるのは云何なる理由であらうかといふ疑問がある。これに對して一應解釋すれば、畢竟といふは必ずしも卽時に同等となるのではない、唯だ同等といはるゝ意味があると解しても善からう。併しこの解釋では殊に上地の菩薩と等しくなるといふ意味が鮮明にならぬ。何故ならば自然に等しくなることならば佛と等しとも言ひ得やうから、それでこの疑問は正しく次の如く解かるゝ。蓋し菩薩第七地に至ると、大寂滅の境に入り、上、求むべき佛位を見ず、下、救ふべき衆生を見ぬのである。その爲めその寂滅の中に沈んで佛道を捨てゝ涅槃に隱れむとするのである。この場合若し十方諸佛の威神力が勸勵し給ふことがないならば、そのまゝ涅槃に入りて二乘と異るところがないのである。然るに菩薩もし安樂國に往生して阿彌陀佛を見たてまつれば、卽ちこの難がない。この意味に於いて畢竟平等といふべきである。また『無量壽經』の中に阿彌陀如來の本願には『もし私が佛になる時、他の諸佛の國から私の國に生れ來れる菩薩達は必ず菩薩の最高位に至ることが出來ませう。もつと特別の願ひがあつて、衆生を自在に敎化しやうといふこゝろから大悲の鎧を被て、善根功德をつみ重ね、あらゆるものから脫れて

諸佛の國に遊んで菩薩の行を修め、十方の諸佛を供養し、量り知れない多くの衆生を敎化して、この上もない正覺の道を求むる心を起させやうといふのはこの限りでありませぬ。菩薩の最上位に至るものは凡人より超え勝れ、菩薩の行のすべてが現はれて、大悲の德を實行することが出來ませう。もしさうすることが出來ないならば、私は佛にはなりませぬ』と言つてある。この經に依りて彼の國の菩薩を想ふに、恐らく一地より一地と順次に道に昇るのではないであらう。十地の階位といふのは、これ釋尊がこの世界に於いて說き示された道であつて、他方の淨土では必ずしもかゝる階位が必然なのではない。既に言つたやうに、五種の不思議の中でも、佛法は最も不可思議である。若し菩薩は必ず一地より一地に昇るべき者で、超越する理はないと言ふならば、その人未だ事理を詳らかにせぬものである。例へば好堅といふ樹がある。この樹は百年位は枯るゝことなく必ず成長して行く。その成長の程度は毎日百丈づゝであるといふことである。これが百年を延ひ續けたならばその位の長さになることであらう。こても松樹などの比較にならぬことである。然るに松樹が日に一寸も延びぬのを見て、好堅樹の成長を疑ふべきでない。尤も世には、釋尊が唯一度の說法を聞けるものに羅漢の證を得たるものと證明せられたり、一朝にして無生忍を得たる者のあることを說き給ひしを、單に誘導の言であつて實際の說でないといふ者がある。かゝる人々は淨土における超越の事も信ぜぬであらう。非常の言は常人の耳に入らずとは、この事であつて、また仕方のないことである。

已上の八種の功德に於いて、如來の自利と利他との功德を莊嚴し、成就し行ふことは、國土の功德の場合と同樣である。

菩薩を觀るといふは、彼の國の菩薩には四種の正しき修行の功德が成就してゐる。こゝに正しき修行といふのは、眞如は法の正體に相應して修行すれば、行そのまゝ不行である。かく不行にして行ずるを如實の修行、卽ち正しき修行といふのである。體は唯一であるが、意味の上から四種に分つ。故に四行は唯だ一行である。

一には菩薩、一の佛土にありて、身を動かさずして十方に應現し、正しき修行によりて常に佛事を爲すのである。論にこれを『衆生の泥中の華を開かしむる』と言つてある。蓋し八地已上の菩薩になると、常に三昧の中にあり、三昧の力で身を動かさずして、遍く十方に至り諸佛を供養し、衆生を敎化することが出來る。而して衆生を敎化するのは、穢れなき法を說くことによりてゞある。佛は煩惱の氣分すらも無い功德を成就し、それを諸の菩薩の爲めに說き給ふに、諸の菩薩は亦この法を

以て衆生を導き息むことはないのである。また論に『泥中の華』と言ふのは、經に『高原の陸地には蓮華は生じない。濕地の泥の中にのみ蓮華は生ずる』と說いてある。これは凡夫が煩惱の泥の中にありて、菩薩の爲に導かれ、能く佛の覺の華を生ずることを喩へたものである。誠に菩薩にては、三寶を興隆して、常に絕えぬやうにするものである。

二には菩薩が身を十方を現ずるに、時の前後がないことである。卽ち一心一念に大光明を放ちて遍く十方世界に至り、衆生を敎化し、種々の方便をもて、一切衆生の苦を除くのである。

三には菩薩は一切の世界に於いて、あらゆる佛說法の會に於ける大衆を餘すところなく觀照し、そして、廣大無邊なる供養と恭敬とをもて、諸佛如來の功德を讚歎するのである。肇公謂く、『法身は像なくしてしかも形を異にし、無言の韻に應へて詮すことが彌廣い。深智の方便は謀でなくてしかも動作が自然に事理に合す』と。蓋し菩薩の德こそ、正しくこれであらう。

四には菩薩が、十方の世界の佛法なき處に生れて、佛・法・僧・の功德を住持し、遍く一切の衆生に示して、如實の修行を領解せしむるのである。たとへ上の三種の德ありても、それは有佛の國土に限るやうに思はれぬでもない。故に若しこの第四の功德なくば、法身も法でないことゝなり、善も善として缺くるところがあることゝなる。

第四章　願心の莊嚴

『已上の三種功德は、これ如來の願心によりて莊嚴せられたものである。それで三種の莊嚴も略していへば一法句に收まる。一法句とは淸淨句、淸淨句とは眞實の智慧に證らるゝ無爲の法身である』

淨土の三種功德は、その本四十八願等の淸淨なる願心に依りて莊嚴せられたものである。因が淨き故に果もまた淨い。因が無いのでもなく、他の因に依るのでもないのである。

『略していへば一法句に收まる』といふのは、國土の莊嚴十七句と如來の莊嚴八句と菩薩の莊嚴四句とを廣とし、一法句を略とするのである。こゝに廣と略と相收まることを說く所以は、諸の佛と菩薩には二種の法身がある。一つは法性法身、二つは方便法身である。法性法身に由りて方便法身は生じ、方便法身に由りて法性法身が現はれる。この二つの法身は異でありながら分つことが出來ず。一でありつゝ同としてはならぬ。それであるから、廣略相ひ收め、兩者を統ぶるに法の名を以てしたのである。菩薩もしこの廣と略と相收まることを知らねば、自利し利他することが出來ぬのである。

その『一法句こは清淨句、清淨句こは眞實の智慧に證らるゝ無爲の法身である』それでこの三句は互に相攝まるのである。卽ち云何なる意味で法こいふか、それは清淨であるから。云何なる意味で清淨こいはるゝか。それは眞實の智慧、無爲の法身であるから。眞實の智慧こは法の如實なる相を知る智慧である。法の如實なる相は無相であるから、眞の智は無知である。無爲の法身こは法の本性を體こする身である。法の本性は空（寂滅）であるから、法身は無相である。無相であるからまた能く相ならぬこはない。故に相好に莊嚴されたるもの、卽ち法身である。また無知であるから知らざることがない故に一切の事理を知る智慧そのまゝ眞實の智慧である。眞實の文字で智慧を形容したのは、智慧は作でなく、非作でもないからである。無爲の文字で法身を標示したのは、法身は感覺の對象でなく、また感覺の對象であることを拒むものでもないからである。でないこいふことを否定するのは、この否定が能くであることを現はすからであらう。併し其處ででないこいふことの無いのをであるこ固執してはならぬ。何故ならば、それ自身であるものは絕對である故に、またであるこいふことも出來ぬから、されば眞實の智慧も無爲の法身こは、であるでなく、でないでなく、百の否定も及ばぬものである。故に清淨句こいふのである。

『この清淨こいふことに二種あり、一は器世間清淨、二は衆生世間清淨である。前者には國土莊嚴が攝められ、後者には佛こ菩薩この莊嚴が攝められる。かくて一法句に二種の清淨を攝するのである』

清淨句を二種に分てる所以は、衆生は各自の業に報いたる體、國土は衆生共通の業に報いて衆生に用ゐらるゝものであつて、兩者は一つでないからである。されど總ての法は心より成りて、心の外の境界はない。この點からいへば、衆生こ國土こ、別こも同こもいふことは出來ぬ。一つでないから二種に分ち、異でないから同じく清淨こいふ。國土は器世間こいつたのは、器こは用ゆるこいふことである。卽ち彼の淨土には此彼の清淨なる衆生の受け用ゆる所であるからである。淨き食も、不淨の器を用ゆれば、器の不淨である爲に食も亦不淨こなり、不淨の食に淨き器を用ゆれば、食の不淨なる爲に器も亦不淨こなる。されば食こ器こ兩者俱に潔くして始めて淨こいふことが出來る。それ故一つの清淨こいふ名に、必ず二種を攝むるのである。

さてその衆生清淨こいふは、正しく佛こ菩薩ではあるが、又彼國の人も天もこの清淨の衆に攝まる

のである。然るに彼國の人天は實の清淨に達して居らぬけれども、清淨の衆と名づけられるのは何故であらうか。それは恰も出家の聖人は煩惱の賊を殺せるが故に比丘と名づくるのであるが、凡夫の出家せる者を邪を持つと戒を破れるとに關らず、皆比丘と名づくるやうなものである。また轉輪王の王子は、生れたる時既に大人の相を具へ七つの寶を所有し、未だ王の事を爲すことが出來ぬけれども王と名づけられる。それは必ず轉輪王となるからである。彼の國の人天も同樣で、皆大乘の正定の聚に入り、遂には必ず清淨の法身を得ることが出來る。故に清淨の衆と名づくることが出來るのである

第五章　方便に依る衆生救濟

『菩薩は一法句に於いて「止」を修し、三種功德に於いて「觀」を行じて、柔輭の心を成じ、眞實に廣略の法を知りて、こゝに巧方便廻向を成就する』

先きに說ける止と觀とは、彼の廣と略とに相ひ順ひて、其處に不二の心を成ずる。この止觀不二の心を柔輭心といふのである。卽ち、止と觀とは恰も水の清さと靜かさと相伴ちて、始めて影を映すといふことが成立するやうなものである。『眞實に廣略の法を知る』とは、法の如實の相を知るのである。『巧方便廻向を成就する』とは、廣略共に法の如實の相である。その如實の相を知るが故に、隨つて迷界の衆生の虛妄の相を知ることが出來る。衆生の虛妄を知れば、自然に眞實の慈悲を生ずるのである。また眞實の法身を知れば、自然に眞實の歸依を起すのである。その慈悲と歸依とのことは、已下に說くが如くである。

『巧方便廻向とは、禮拜等の五種修行によりて集めし一切の功德の報を自身の安樂の爲にせず一

切の人々の苦しみを救はんが爲にし、一切の人々を攝取して、共に同じく彼の安樂國に生れんと願ふことである』

王舍城に說き給ひし『無量壽經』に依れば、三種の願生者がある。その行に優劣はあれど、何れも無上菩提を求むる心を發さぬはない。この無上菩提の心は卽ち佛と作らんと願ふ心である。佛と作らんと願ふ心は卽ち衆生を救はんとする心である。衆生を救はんとする心は、卽ち衆生を攝め取りて佛まします國土に生れしむる心である。それ故、彼の安樂淨土に生れむと願ふ者は、必ず無上菩提の心を發すのである。若し人、無上菩提の心を起さないで、しかも但だ彼國土は樂しみを受くることと斷え間がないといふことを聞き、その樂しみの爲に生れやうと願ふのでは、恐らく往生することが出來ぬであらう。それ故『自身の安樂の爲にせず、一切の人々の苦しみを救はんが爲めにす』と說かれたのである。彼の安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力に持たれて、樂しみを受くることと斷え間はない。併し眞の願生者はその樂しみを唯だ一つの目的とはせぬのである。

廻向とは、自ら集めたる一切の功德を、一切の衆生に施し與へて、共に佛道に向はしむることである。巧方便といふは、菩薩が自己の智慧の火をもつて、一切衆生の煩惱の草木を燒き盡さう。若し一衆生でも佛とならぬものがあらば、我も佛とは作らぬといふ願力である。然るに現に衆生未だ盡く佛とはならぬのに、菩薩已に自ら佛と作るのは、恰も木を箸にして一切の草木を摘んでは燒く場合に、草木が燒き盡さぬ中に、箸とした木が燃え盡すやうなものである、これ卽ち其身を後にしつつその身が先だつ所以である、これを巧方便といふ。こゝに方便といふのは、『一切の人々を攝取して共に同じく彼の安樂佛國に生れんと願ふ』ことである。彼の佛國に生るゝはこれ遂には佛と成るの道路無上の方便である。

第六章　菩提の障を離るゝこと

『かく善く廻向を知れる菩薩は、即ち能く菩提に違ふ三種の法を離るゝことが出來る。三種とは、一には智慧に依りて自己の樂を求めず、我執の爲に自身を貪着することから離れる』

進むを知りて退かぬやうに守る、これが智である。空・無我の理を知る、これが慧である。智あるが故に自己の樂を求めず、慧あるが故に我執の爲に自身を貪着することから離れる。

『二には慈悲に依りて一切の衆生の苦を救ひ、衆生を安んずる心のない障を離れる』

苦を取り去るが慈、樂しみを與ふるが悲である。慈あるが故に一切衆生の苦を取り去り、悲あるが故に衆生を安んずる心のない障を離れる。

『三には方便に依りて一切の衆生を愍むが故に、自身を供養する心から離れることである』

正直を方といひ、己を外にするを便といふのである。正直に依りて一切の衆生を愍む心を生じ、己を外にすることに依りて自身を供養する心から離れるのである。已上を三種の菩提に反く障を離ると名づくるのである。

第七章　菩提に順ふの道

『かくて菩提の三つの障りを離れるならば、自然にまことの菩提に隨順する三つの心を得る。一には無染清淨心を得る。そは自身の爲に樂を求めないから』

菩提はこれ染なき清淨の處である。若し自身の爲に樂を求むるならば、菩提に反くであらう。されば無染の清淨こそ菩提に順ふの道である。

『二には安清淨心を得る。そは一切の人々の苦を救ふから』

菩提はこれ一切の衆生を安穩にする所である。それ故若し何うかして一切衆生を導き、生死の苦しみを離れしめぬならば、菩提に反くであらう。隨つて一切衆生の苦しみを取り去ることは、これ菩提に順ふの道である。

『三には樂清淨心を得る、そは人々を攝取して彼の國に生れんと願ふことは、自ら一切の人々を

して菩提を得せしむることになるから』

菩提はこれ畢竟常住安樂の所である。それ故、若し一切の衆生をして畢竟常住安樂を得しめぬならば、菩提に反くであらう。されば畢竟常住安樂は何に依りて得ることが出來るであらうか、それは大乘門に依りてゞある。大乘門といふのは彼の安樂佛國である。それ故『人々を攝取して彼の國に生れしめんと願ふ』は、卽ち菩提に順ふの道である已上を三種の菩提に順ふ道と名づける。

第八章　智慧慈悲方便の名と其意味

『然るに智慧と慈悲と方便とは般若（智慧）を攝め般若（智慧）は方便を含んでゐる』

『般若』といふは、理に達する慧の名、『方便』といふは、事に通ずる智の名である。理に達すれば心の行は寂まり、事に通ずれば悉く衆生の根機を知ることが出來る。根機を照らす智は根機に應じつゝ無知であり、寂かなる慧は無知でありつゝ根機を照らすのである。されば智慧と方便と相緣りて動き、相緣りて靜かである。動じて靜を失はぬのは智慧の功である。靜にして動を失はぬのは方便の力である。それ故、智慧・慈悲・方便は般若を攝め、般若は方便を攝めると說かれたのである。蓋し智慧と方便とはこれ菩薩の父母である。もし智慧と方便とに依らねば菩薩の道は成就しない。何故なれば、若し智慧なしで衆生の爲めに事を爲さば顚倒の誤に陷り、若し方便なしで法性を觀れば空滅を證る誤りに陷るからである。

『また自身を貪着せぬことゝ、衆生を安んぜぬことゝ、自身を供養することゝを離れることゝ

は、卽ち菩提を障へる心を離れるのであるから、唯一の無障心と言へやう』

事物には障碍といふものがある。風は靜かさを障へ、土は水を障へ、濕は火を障へ、五逆と十惡は人間と天人とを障へ、四顚倒は聲聞の證を障へるが如くである。今こゝに擧ぐる自身を貪着するなどの三種は、菩提を障へる心である。故に無障の心を得やうと思ふならば、この三種の心を離れねばならぬ。

『同樣に無染と安と樂との三種の淸淨心は、唯一の妙樂勝眞心と名づけることが出來る』

樂に三種ある。一つは外の樂、これは五つの官能より生れる樂しみである。二つは內の樂、禪定の中に現はるゝ意識の樂しみがこれである。三つは法樂の樂、これは智慧より生るゝ樂しみである。この智慧より生るゝ樂しみは、佛の功德を愛することから起るのである。今自身を貪着することゝ、衆生を安んぜぬことゝ、自身を供養することゝを離れて、その心淸淨に增進する時、それは妙樂勝眞心と呼ばれるのであるが、その妙樂といふは、その樂しみが佛に緣りて生ずるからである。勝とは迷界の樂しみを超え勝れてゐるからであり、眞とは虛僞でなく、顚倒でないことを現はすものである。

第九章　願事の成就

『菩薩はこの智慧心・方便心・無障心・勝眞心ありて、能く淸淨の佛國土に生るゝことが出來る』智慧・方便・無障・勝眞の四種心の淸き功德が能く彼の淸淨の佛國土に生るゝを得しむるのであつて、その他の緣によりて生るゝのではない。

『而して菩薩をして意のまゝなる自在を得しめる、何故なれば、これらの淸淨心こそは、五念の行卽ち身業・語業・意業・智業・方便智業を成就せしむるものであるから』

身業とは禮拜、語業とは讃嘆、意業とは作願、智業とは觀察、方便智業とは廻向である。この五種の業が和合して、往生淨土の法に契ひ、菩薩をして意のまゝなる自在を成就せしむるのである。

第十章　自利と利他との滿足

『更に五種の門ありて、順次に五種の功德を成就する。その五種の門とは、一、近門、二、大會衆門三、宅門、四、屋門、五、園林遊戯地門。この五種門、前四は入の功德を成じ、後の一は出の功德を成就する』

こゝに擧げられた五種の門は、入出の順序を現はすものである。卽ち入の初めは淨土に至ることこれ近づく相である。そは大乘の正定の聚に入りて無上菩提に近づくのである。かく淨土に入り已れば如來の大會衆の數に加はる。聖衆の數に入り已れば、心を安んじて修行の出來る宅に至るであらう。その宅に入り已れば正しく修行する居屋に至ることが出來る。そこで修行が成就し已れば、衆生を敎化する境地に至るべきである。この敎化地こそは卽ちこれ菩薩の自ら娛樂する境地である。故に出門を園林に遊戯する地と稱するのである。

『入の第一門とは、阿彌陀佛を禮拜して彼の國に生れんと願へるが故に、その願の如く安樂世界に生るゝを得ることである。入の第二門は、阿彌陀佛を讃嘆し、名の義に順ひ、如來の名を稱へ、如來の智慧の光に依りて修行せるが故に、聖達の中に伍するを得るに名づける。入の第三門とは、一心專念に彼の國に生れて寂靜の境なる「止」の行を修めんと願へるが故に、蓮華藏世界に入ることが出來ることをいふのである。入の第四門とは、かの國の妙なる莊嚴を觀察して、「觀」を修めんと專念せることに依りて、佛國に到り種々なる法の樂しみを受くることである。最後に出の第五門といふのは、大なる慈悲をもて、すべての惱める人々を觀、こゝに應化の身を現はして、生死の園煩惱の林の中に分け入り、思ふがまゝに衆生を敎化するの境地に至ることである。この自在の敎化は、正しく菩薩の本願力の廻向によるのである』

佛を禮して佛國に生れんと願ふのが初めの功德の相である。如來の名の義に依りて讃嘆するは第二の功德の相である。寂靜なる「止」を修むる爲に彼の國に生れんと願ふが第三の功德の相である。さて入の第四門に種々なる法の樂しみといふとがあるが、それは「觀」の行の中に、佛國の淸淨なるを觀る味ひ、衆生を救濟する大乘の味ひ、不虛の業に住持せらるゝ味ひ、機に應じて佛事を爲し、佛土を莊嚴する味ひ、これらの量りなき佛道を莊嚴する味ひがあることを現はすのである。これが第四の功

徳の相である。また出の第五門に説かれし應化の身とは、『法華經』(二三)に説かれし觀音の三十三身の示現の如き類である『遊戯』といふ言葉には二つの意味がある。一つは自在の意味、菩薩の衆生を導くや恰も獅子が鹿を搏ふるに何の困難もなく、遊戯てゝも居るやうに見ゆる如くである。二つは導きつゝ導くところなしといふ意味、菩薩が衆生を觀るに、其處に衆生といふ固定したものはない。隨つて量りなき衆生を導き救ふても、實は一人の衆生も導かれたといふものはないであらう。その點が衆生を導くといふことが遊戯に似てゐると云はるゝ所である。『本願力』といふのは、大菩薩が法身をもつて常に三昧の中にあり、而して*様々の身、様々の神通、様々の説法を現はすことは、みな本願力より起るのである。これは恰も阿修羅の琴は鼓つ者なくとも、音曲が自然に生ずるが如くである。これが教化地、第五の功徳の相である。

『かくして菩薩は四種の門に入りて自利の行を成就し、第五の門に出でゝ、利他の行を成就する。而してかく自利々他することに依りて、速かに無上道を成就するのである』

『菩薩は四種の門に入りて自利の行を成就す』といふ。その成就とは自利の滿足することである。

自利に依りてこそ利他せらるゝ。自利することが出來なくては利他するといふことはあり得ぬのである。また『第五の門に出でゝ利他の行を成就する』といふは、廻向の因で教化地の果を證るに、その因その果、一つとして利他でないことがないのである。かく利他するに依りて自利もせらるゝ、利他することが出來なくて自利のみするといふことはあり得ぬことである。『かく自利々他することに依りて速かに無上道を成就する』といふ。その無上道とは佛の獲得せらるゝ法である。この無上道を得るものを佛と名づける。今速かに無上道を得るといふのは、早く佛と作るを得といふことである。『無上』とはこの道は理を窮め、性を盡すこと、これに過ぐるものがないからである。この道は唯だ聖智の知るところ、法身の遍通するところである。『道』とは無碍の道である。經に『十方の無碍人は、一道より生死を出づ』と説いてある。一道とは一つの無碍の道である。無碍とは生死卽涅槃と知ることである。かく不二の法に入るのが無碍の相である。(二四)

されば云何にして速かに無上道を成就し得るのであらうか。論には『五門の行を修めて自利々他成就するから』と簡明に説いてある。然るに明かにその根本を究むれば、阿彌陀如來を增上の緣とするのである。こゝで「他利」といふ言葉と「利他」といふ言葉の別を知らねばならぬ。佛からいへば利レ他

である。衆生よりいへば他利である。今論では殊に佛力を說かうこせらるゝ。故に利他こいふ文字を用ゐられたのである。元來かの淨土に生るゝこと、及び彼國の菩薩や人・天の修むる行は、皆阿彌陀如來の本願力に緣らぬものはない。若しそれが佛力に緣るのでないならば、彼の佛の四十八願は無意味になるであらう。それで今、明かに三つの願を取つて、その事を證明する。願に『もし私が佛になる時、あらゆる衆生が至心に信じ樂つて、私の國に生れたいこ欲ふて、せめて十聲でも念佛して、若し生るゝことを得ないならば私は佛にはなりませぬ。但し五逆罪を犯したものこ、佛のみ敎を謗つたものこはこの限りでありませぬ』こ、この佛願の力に緣りて、十聲の念佛すれば往生を得。往生を得るが故に卽ち迷の世界に輪廻することを免れる。既に迷の世界の輪廻がない。これ速かに無上道を得る第一證である。願に『もし私が佛になる時、私の國の人達がこの世で佛になるに定まつた位に住し、かならず迷ひを離れて、滅度になることが出來ないならば、私は佛にはなりませぬ』こ。この佛願の力に緣りて正定の聚（佛になるに定まつた位）に住し、正定の聚に住するから必ず涅槃に至る。隨つて迷の世界へ復るこいふことはない。これ速かに無上道を得る第二證である。願に『もし私が佛になる時、他の諸佛の國から私の國に生れて來る菩薩達は、必ず菩薩の最上位に至ることが出來ませう。もつこも特別の願ひであつて、衆生を自在に敎化しやうこいふこゝろから、大悲の鎧を被て、善根功德をつみかさね、あらゆるものから脫れて諸佛の國に遊んで菩薩の行を修め、十方の諸佛を供養し、量り知れない多くの衆生を敎化してこの上もない正眞の道を求むる心を起させやうこいふものは、この限りでありませぬ。菩薩の最上位に至るものは凡人より超え勝れ、菩薩の行のすべてが現はれて、大悲の德を實行することが出來ませう。もしさうすることが出來ないならば、私は佛にはなりませぬ』こ。この佛願の力に緣りて、凡人より超え勝れ、菩薩の行の凡てが現はれて、大悲の德を實行する。既に凡人より超え勝れ、菩薩の行の凡べてが現はれる。これ速かに無上道を得る第三證である。これらの證明に依りて思ふに、他力を增上の緣こすることは、實に拒むこが出來ぬであらう。

更に例をもつて自力こ他力この別を示さう。人ありて地獄・餓鬼・畜生の苦しみを畏れ、これを免れんために戒律を受け持つ。戒律を受け持つに依りて言行を正しくして、禪定を修め、禪定を修めて神通を習ふ。その神通の力で能く四天下に遊ぶこが出來る。これが自力の例である。又驢馬に跨つて行る凡庸のものでも、轉輪王の行に從へば、虛空に昇りて四天下に遊ぶに碍げがない。これが他力の例である。愚かなる哉、他力を疑ふこ。後の學者よ。他力の乘託すべきを聞かば、信心を生ずべ

きである。決(けつ)して自力(じりき)に固執(こしつ)すべきではない。

讃阿彌陀佛偈

解題

曇鸞大師が云何に龍樹菩薩を距世の師と仰ぎ給ひしかは、その『往生論註』にも明かに現はれてゐる。いまた『無量壽經』によりて『讃阿彌陀佛偈』を誦し給ふ。これ彌陀佛の功德を讃詠して恐くは龍樹の『十二禮』に應和せらるゝものであらう。而して親鸞聖人の淨土和讃は、またこの曇鸞の讃歌のこゝろを述べ給ふより始まるのである。

讃阿彌陀佛偈

——『無量壽經』に依りて——

法師曇鸞作

南無阿彌陀佛

眞心もて、西方に在す阿彌陀佛に、歸命し禮したてまつる

彌陀、御佛となりまして
壽命は永遠に限りなく
光、十方に遍ねくも
盲ひたる世を照らします

智慧の光、量りなければ

曇鸞大師部

その名も無量光と呼びまつる
量りあるものみなは
曉の光をうけぬことなし

邊なき解脱の光
そのみ光に觸るゝすべてに
有と無とこの見を離れしむ
佛は平等の覺者にて在す

光の雲は大空のごと
何物も礙ふることなし
すべての礙を融け去らしむ
無礙光の佛に歸命しまつる

對なき清き光に
遇ふ者は業繫除かる
さればその光ある佛こそ
衆生が畢竟依にてぞ在す

勝るものなき彌陀の光を
光炎王と呼びまつる
この御光の照らすこころ
迷の闇は啓かれむ

道の光ほがらかに
罪の垢を洗ひつゝ

讃阿彌陀佛偈

曇鸞大師部

解脫の德を與へます
その御光は清淨なり

慈光はるかに被らしめ
光をうくる物皆に
歡喜の色を與へます
大安慰こそ尊けれ

*無明の闇を破ります
智慧の光ぞ仰がるゝ
すべての佛聖者らも
この御光を歎め給ふ

光、照らして斷へざれば
不斷光こそ呼びまつる
この御光の力にて
信心斷えで往生す

彌陀の光を測るものなし
難思光こそ呼びまつる
十方の佛はその德を稱へて
往生人を讃め給ふ

十方の佛に歎へらるゝ
神光は相なければ名づけがたし
光に因りて佛こ作りませる

讃阿彌陀佛偈

曇鸞大師部

無稱光を歸命しまつる

その光は日月に超ゆ
釋尊の御言もてすらも
遂に歎め盡されじこそ
等なき佛を仰ぎまつる
願はくばすべての衆生こゝもに
安樂國に往生せむことを
眞心もて西方に在す阿彌陀佛に歸命し、禮したてまつる

彌陀、み佛こなりまして
初めて法を說ける時
集へる聖者數知れず

廣大の會ぞ仰がる、

かの佛國の菩薩等は
普賢の德に遵ひて
無佛の國に生れつゝ
多くの衆生を救ふなり

廣く如來の法の藏を開いて
普ねく十方の衆生に與ふる
菩薩を限りなく生み給ふ
大心海こそ尊けれ

觀音勢至もろともに

讃阿彌陀佛偈

曇鸞大師部

慈の光あまねくも
縁ある者を救ひつゝ
息ひ給はむ時もなし

安樂國に生れなば
妙なる三十二相得て
障ふるものなき深き智慧
皆悉く具足せば

性の利きも、鈍きをも
距てはあらず、さとり得て
佛と成らむその日まで
再び惡趣にかへらじな

釋迦牟尼のごと、濁り世に
示現すべくは、おもふまゝ
かゝる利益を成り得たる
安樂國に往かばやな

安樂佛國の菩薩たち
わがため『われら』のおもひなく
淨き蓮のこゝろもて
智慧より法を說きたまふ

親し、疎しのへだてなく
往來進止ひたすらに

讃阿彌陀佛偈

曇鸞大師部

泛べる舟のおもふまゝ
人をすくふになべてよし

智慧の燈炬、夜を照らし
修行はこゝろの眼を開く
かゝる功德のほこりなき
菩薩在す國に往かばやな

安樂國に生れては
聲聞菩薩人天ら
智慧こゝ〳〵く朗かに
相かたちの異らず

たゞ在りし世のむかしの名
つらねたれども身は妙に
うつし世にたぐへむものもなし
平等力を伏し拜む

安樂國に生れては
必ず無上道を得ん
僞善こ疑惑はこゝになし
十方の佛も讃へ給ふ

阿彌陀佛の御名をきゝ
こゝろに信じ歡びて
一念も疑はざるもの は

讃阿彌陀佛偈

曇鸞大師部

願ひのまゝに皆生れむ

安樂國の聖衆らは
現しこの世のものならず
釋迦無碍の御語さへ
わづかにたゞへ說けるのみ

いゞも賤しき乞人もて
世の帝王にたゞへむか
世の帝王をまた更に
金輪王にたゞへむか

*

更に六天にいたるまで

つぎ〳〵に皆たぐふなし
さあれど、天のいゞ高き
色像も淨土には及ぶなし

淨土の聖衆は彼よりも
十萬億位にすぐれたり
法藏願力のかくは爲す
大心力を伏し拜む

十方の佛の國より
數かぎりなき衆生の
已にこの國に來生せるぞゞ
今も未來も極はあらじ

讃阿彌陀佛偈

阿彌陀佛の御名をきゝ
歡喜をもて讃仰し
心、歸依する一念に
功德の寶は與へらるゝ

たとひ大千世界に
みてらん焰ありとても
その中わけて御名をきけ
聞かば不退の道を得む

彌陀の神力は極みなし
十方の佛ほめませば

菩薩はみな彼國に往勤き
經法をきゝて敎を宣ぶ

その來生する菩薩らは
音樂をもて佛を讃へ
或は天華を捧げて供養し
邊りなき行願を進む

自然の七寶より成れる
國土は廣大にして限りなし
佛の本願力によりて
妙なる世界は莊嚴せらる

曇鸞大師部

妙なるみ光かがやけば
心身共に愉悅して
暑さ寒さの憂さへ
なくて常世の平和なり

自利の力と利他の力の
圓滿して成れる淨土よ
その巧みなる方便をば
盡せる莊嚴に歸命しまつる

寶の地は平かに
山、川、陵や、谷もなし
佛の力のかくぞなる

不可思議尊に額づかむ

菩提の樹は高く聳えて
枝葉四方に敷く二十萬里
微風これを吹けば法の音を奏で、
聞けるもの皆法忍を得

法忍を得るは本願の力ぞ
また威神の力に依る
佛の慈悲は稱るべからず
眞無量を仰ぎまつる

美しき蓮華は世界にみつ

讃阿彌陀佛偈

その一々の華に千萬の葉あり
各々の色は各々の光を放ち
鮮かにしてまた眩し

一々の華の中より
三十萬億の光を放ち
その光よりまた
三十萬億の佛現はる

その佛はまた百千の光を放ち
普ねく妙なる法を說きて
衆生を佛道に導きたまふ
阿彌陀の神力量りがたし

七寶の池の中には
八功德の水みてり
菩薩、入りて浴すれば
神ひらけ垢除かる

さゞ波はゆるく流れて
自然に法の音をしらぶ
苦難の聲のことはに絕えたる
安樂國ぞ願はしき

願はくばすべての衆生と共に
安樂に往生せんことを

眞心もて西方に在す阿彌陀佛に歸命し、禮したてまつる

本師の菩薩、龍樹は
法の亂れし世に生れて
邪を破り正しきを開き
阿彌陀に歸して安樂に生る

龍動けば雲したがひ
雨ふりて草木の舒ぶるごと
龍樹の德は大なる哉
眞心もて歸命しまつる

始めなき昔より
虛妄の世を我は循ぐりぬ
造れる業に繫縛れて
いつか迷の道を離れむ

我いま佛の功德を讃へて
十方の有緣に聞かしめむ
願はくば慈光、護念し給ひて
菩提の心を失せざらしめよ

すべての佛は
一つの道より覺者となり給ふ
智慧は圓滿にて差別なし
各〻緣に隨ひて衆生を救ふ

されば我、彌陀の國を願ふは
卽ちすべての如來に歸するものなり
今一心に一佛を讃ふ
願はくばそをして十方の佛に遍からしめよ
願はくばすべての衆生と共に
安樂國に往生せんことを

略論安樂淨土義

解題

『略論安樂淨土義』は曇鸞大師が彌陀の淨土に關する諸問題に就いて、解釋を與へられたものである。彌陀の淨土とは云何なる世界であり、また云何なる因緣に依りて其所に往生するを得るかを說く。特に後半に於いては佛智を信ずるといふことに就いて、種々なる理論的疑問を揭げ、一々詳かに解說せられてあるところ、自ら信仰と知識との問題に觸れて、其所に深き領會が暗示せられてある。

略論安樂淨土義

釋曇鸞作

一

安樂國は三つの世界の中では、何れの世界に屬するであらうか。

『大智度論』に依れば、一般に淨土は三つの世界に屬するものではない。何故なれば、淨土の衆生には欲がないから欲界ではなく、地上に居るから空中に住む色界とも異る。また形色があるから無色界ともいへぬからである。されば安樂國も三つの世界何れにも屬せぬは言を俟たぬ。加之、『無量壽經』に依れば、阿彌陀佛は本菩薩の道を行ぜられし時、その名を法藏と呼び、世自在王佛の所にてもろもろの淨土を莊嚴せらるゝ行を尋ねられた。その時世自在王佛は、法藏に對して二百一十億の佛國について、住人の善惡と國土の麤妙とを說き、且つ之を示現して觀せ給ふた。之に依りて法藏菩薩は世自在王佛の前にて、大なる誓願を發して佛國を選び取り、量りなく邊りなき時の間、その願に隨つて

修行し、萬の善を圓滿して*無上道を成し遂げられたのである。かゝる特別の業にて感得せられた世界であるから、凡夫の業より成れる三つの世界と類を異にするのである。

二

安樂國には何れだけの莊嚴があつて、淨土と名づけらるゝのであらうか。

『無量壽經』には、法藏菩薩の四十八願に依りて成就せられたる莊嚴が詳かに說かれてある。その內容は『讃阿彌陀佛偈』に述べて置いたから、今こゝでは述べずに置く。もし『往生淨土論』に依れば安樂國には二種の淸淨があつて二十九種の莊嚴を攝めてゐる。その二種の淸淨とは器世間と衆生世間との淸淨である。器世間の淸淨に十七種の莊嚴がある。一には國土の相は三つの世界に勝れ、二にはその國廣大にして大空の如く限りがない。三には菩薩の慈悲の心の穢れなき善によりて成就せられてゐる。四には淨き光に滿ち、五には妙なる寶を具へてゐる。六には光、常に世を照らし、七には寶物柔かにして觸るゝもの悅樂を生ずる。八には千萬の花は池を嚴り、高殿・樓閣及び種々の樹はそれぞれの光を有ちてその中に十方世界を影現する。また量りなき寶の網は空を覆ひ、四面に懸れる鈴は常に法音をしらぶることである。九には大空まで常に天の華・天の衣を雨らして國土を莊り、また天の香を雨らして薰り普ねく世界に行き渡る。十には佛智の光は愚癡の暗を去り、十一には國土の名遠く十方に聞えて、聞く者の魂を開く。十二には阿彌陀佛、法王として住持し給ひ、十三には如來の覺の華の中より聖者が生れる。十四には佛法の味に親しみ禪三昧を糧とする。十五には永へに身と心とこの惱みを離れて常に樂しみを受くる。十六には其處には二乘と女人と不具者の名さへもない。十七には衆生の欲樂は悉く滿たされる。已上の十七種を器世間の淸淨と名づくるのである。

衆生世間の淸淨には、十二種の莊嚴がある。一には量りなき寶にて飾られし妙なる華が佛の坐となつてゐる。二には佛の身が量りなき相好と光明とで嚴られてゐる。三には佛の法を說き給ふや、その辯は善く機根に相應し、その內容は純潔で聞く者をして必ず悟解せしむる。四には佛の智慧は大空の如く、事理の普遍と殊別とを明かにして、而も心に別け距てがない。五には智慧、眞理を離れざる菩薩その數多く、六には彌陀その中にありて、恰も大海より高山を望むが如き偉大なる法王の相を具へてゐらるゝ。七には大衆に圍遶せられ給ふこと、師子の王の師子の群を隨へるがごとくである。八には佛の本願力に依りて、あらゆる功德を住持し給へば、遇ふ者は空しく過ぐることなく、能く一切の*功德を滿足せしめらるゝ。されば未だ淨心を證り得ざる菩薩も、必ず平等の法身を證ることが出來て、

淨心の菩薩と同一なる寂滅の境地に至ることが出來る。九には安樂國の菩薩は、身を動かさずして普ねく十方に至り、種々なる應現を爲して修行しつゝ常に佛事を作す。十にはその應現の身が一切の時において、前後なく、一心をもて一念に光を放ち、普ねく十方世界に至り、衆生を敎化して、種々の方便もて、衆生の苦しみを滅ぼすことである。十一には是等の菩薩は普ねく、一切世界に於いて、諸佛と、その大衆とを觀照し、廣大の供養を爲し、恭敬して諸佛の功德を讃嘆する。十二にはこの菩薩は十方の世界の佛・法・僧なき處において、能く三寶の功德を說き、聞く者をして如實の修行に入らしむる。已上法王の八種の功德と、菩薩の四種の功德とを合せて衆生世間の淸淨と名づける。安樂國はかく二十九種の莊嚴ありて功德圓滿であるが故に、淨土と名づけらるゝのである。

三

安樂國に往生するは、云何なる因緣に依り、また往生人には何れだけの種類があることであらうか。

『無量壽經』に依れば、唯だ上・中・下の三輩が說かれてある。然るに『無量壽觀經』に三輩の各々に更に上・中・下を分ち、九品としてある。今は既に『無量壽經』に依りて『讃歌』を作つたことであるからこゝでも斯經に依りて三輩として論ずることゝしやう。その上輩の往生には五つの因緣がある。

一、家を捨て欲を離れて僧となり、
二、無上なる菩提を求むる心を發し、
三、一向に專ら無量壽佛を念じ、
四、さまざまの德を修め、
五、安樂國に生れむと願ふ。

この因緣を具ふれば、命終らんとする時に、無量壽佛は大衆と共に、その人の前に現はれ給ふ。そこで佛に隨つて安樂國に往生し、七寶の花の中で自然に化生するであらう。而して不退轉の地位に住し、智慧はすぐれ、神通の自在の身となるのである。

中輩の往生には、七つの因緣がある。

一、無上なる菩提を求むる心を發し、
二、一向に專ら無量壽佛を念じ
三、多少の善を修め齋戒を持ち

四、塔婆を立て、佛像を作り
五、僧に食を供養し
六、燈をともし、香をたき
七、已上の總てを廻向して安樂國に生れんと願ふ。

これに依りて命終らんとする時に、無量壽佛は其の光明も相好も殆ど眞佛の如くなる身を化現し給ひて、大衆と共に其人の前に現はれられるであらう。そこで其の化佛に隨ひて安樂國に往生し、不退轉の地位に住し、功德も智慧も上輩に次ぐ程のものとなるのである。

下輩の往生には、三つの因緣がある。

一、たとひ樣々の德を修むることが出來ずとも、無上なる菩提を求むる心は發すこと、
二、一向に專ら無量壽佛を念じて、十念相續すること。
三、至誠の心もて安樂國に生れんと願ふこと。

之に依りて命終らんとする時、夢の如くに無量壽佛を見たてまつりて往生を得、その功德も智慧も中輩に次ぐことゝなるのである。

尙ほこの外に一種の往生がある。それは三輩には屬しない。卽ち疑惑の心をもちながら、樣々の功德を修して、安樂國に生れんと願ふ者である。佛智・不思議智・不可稱智・大乘廣智・無等無倫最上勝智これらの智慧を疑惑して信じないで、しかも善惡因果の理を信じて善を修めて安樂國に生れんと願ふ者である。この種の人は安樂國の七寶の宮殿に生るゝであらう。その宮殿の中で快樂をうくること天の如くである。併し五百歲の間は常に佛を見ることが出來ず、また經法を聞かず、菩薩聖衆に交はることが出來ない。安樂國では之を邊地といひ、また胎生ともいふことである。邊地といふのは五百歲の間、三寶を見聞することが出來ぬこと、恰も邊地にあるものゝ都會を知らざると同じいからである。或はまた安樂國では疑惑者の往生する場所が、實際邊地にあると解しても善い。胎生といふのは、恰も胎生の人は、母胎に宿れる時はまだ人として形體を具へて居らぬことに類例したものである。

四

かの胎生の者は、七寶の宮殿にありて、云何に快樂をうけ、また常に何を憶念するであらうか。

經にはそれを轉輪王の子が罪あつて後宮に幽禁せられ、金鎖で繫がるゝに譬へてある。一種の衣食等は少しも乏しきことなく、王の如くである。けれども王子は、云何に娛樂が與へられても、その

樂を感受せず、偏へにその繫がれから免れんことをのみ念ずるであらう。同樣に彼の胎生の人も七寶の宮殿にありて、好き色・香・味・觸は與へられてゐる。けれども夫を樂しみとなさず、唯だ三寶を見たてまつらず、如來を供養し、善本を修むることの出來ぬことを苦しみとする。依りて卽ち其の本罪を識り、深く自ら責悔て其處を離れやうと求むれば、やがてその願は達せられて、三輩の往生人と同じことゝなるであらう。しかもかく罪を識り自ら責め悔ゆるまでに五百年を經るのである。

五

疑惑の心を以て安樂國に往生せんと願ふを胎生といふ。さらばその疑とは什んなものであらう。何うして疑が起るのであらうか。經では但だ『疑惑して信ぜず』といふのみで、疑の意を分解してない。併し疑惑の人は佛智・不思議智等を領會せずといつてあるから、この智に對する疑を顯開し推求して見やう。

一般に疑惑は佛の智慧を了らぬといふことに起因する。それ故第一の佛智疑惑といふことは、疑惑全體を現はす言葉と見るべきである。この佛智を疑ふといふことに四種あり、之に依りてその四種の疑を對治せん爲めに、不思議智已下の四智が擧げられたのである。四つの疑とは、第一の疑は

かうである。阿彌陀佛を憶念するも必ずしも安樂國に往生は出來まい。何故ならば、經には業道は秤のやうに重い方から先に牽くと說いてある。されば終生云何なる惡をも造らぬことなき身が、何うして十聲の念佛で往生することが出來て、不退轉の地位に入り、惡道の苦しみを離るゝといふことが出來やう。若しそんなことが出來れば、重きもの先づ牽くといふ經說は誤となる。又曠なる昔よりあらゆる業を作つてゐる。それが吾々を三界に繫ぎ止めてゐる。この三界の根本なる煩惱を斷たずに、直少時阿彌陀佛を念じたぐらゐで三界を離るゝことが出來ることすれば、業に繫がるゝといふ原則が破壞さるゝであらうーかゝる疑を除かんがために、不思議智が說かれたのである。

不思議智といふことは、佛の智力は能く少きを多くし、多きを少くし、近きを遠くし、遠きを近くし、輕きを重くし、重きを輕くし、長きを短くし、短きを長くする等、不可思議であることを現はすのである。譬へば百年の間かゝつて薪を聚め、千仞の高さとしたのを、僅かに豆程の火をもて半日の中に焚き盡すことが出來るやうなものである。まさか百年かゝつて積んだ薪だから半日ぐらゐでは焚き盡せぬとは言へまい。また譬へば蹇者が船に乘り追風に任せて一日に千里の遠きに到るやうなものである。誰れかこの場合蹇者はいかで一日に千里を行くことが出來やうと疑ふものがあら

う。また譬へば賤しき貧しき人が寶玉を發見して王に貢ぎ、王は慶んで重賞を與へたとする。されば其の貧賤の者も之に依りて忽ちに富貴となるに違ひない。この場合何人も、數十年も貧困を嘗め盡せるものが俄に富貴になる筈がないといふことは出來ない。また、譬へば凡庸の人も轉輪王の行に隨へば空をも飛ぶべく、千夫も斷つ能はざる十圍の繩も、劍を用ゆれば童子にも兩斷せられる。この例は尠くない、蓋し一切の事柄は自力と他力とに依り、可能と不可能と千態萬狀である。されば礙ある識を以てかの礙りなき法を疑ふべきではない。また五つの不思議の中では、佛法は最も不可思議である。故に百年の惡を重しとなし、十念の念佛を輕しとして、その往生を疑ふてはならぬ。

六

第二の疑はかうである。佛智は人智に對してさ程優ぐれたものと言ふことは出來まい。何故ならば、一種の名は相對から生じたものである。即ち覺の智は不覺より生じ、方向に迷ふといふことは正しき方向に對して生ずるのである。それ故、若し迷が絶えて迷はぬといふことがあれば、恐らく悟が絶えて迷の解けぬといふこともあるであらう。それでなくて迷が解けるといふことがあらば、それは迷へる者の解といはねばならぬ。またそれを解者の迷といつてもよい。畢竟迷と解、解と迷とは手を反覆するやうなものでその體は一つである。言はゞ明昧の異で程度の別に過ぎぬであらう。されば佛智も人智も超然たることは出來ぬ。かく佛智を思想することに依りて疑を生ずる。この疑を對治する爲めに不可稱智が說かれた。

不可稱智といふは、佛智に名づけられるものでなく、相對的に概念されぬことを現はすものである。法もし有ならば、有と知る智はあり、法若し無ならば無と知る智はあり得る。けれども法の眞相は有と無とを離れて居り、而して佛智はその法の眞相と融一してゐるのであるから、その智も亦相對を超へて居り、隨つて何んと名づけて見やうもない。されば解と迷との相對概念で佛智を計らば、依然一つの迷に過ぎぬ。これを例ふれば夢の中で夢覺めて人に夢の話をしてゐるやうなもので、夢覺めを語りつゝ夢見てゐるのである。すべてを知るが佛といふも、佛を知つたものでなく、知るところなきが佛といふも佛を知つたものでない。知るにあらず、知らざるにあらざるが佛といふも佛を知るものでなく、知るにあらざるにあらず、知らざるにあらざるにあらざるが佛といふも佛を知つたものでない。佛智は是等の分別を離れてゐる。故に佛智を對觀しやうすれば思慮はつき、之を指示しやうとすれば言語がたえる。されば『智度論』には、『若し人、般若を見れば縛られてゐる。般若を見ざるも亦た縛ら